主幹◇麻生路郎

川柳雜誌

七月號

大正十三年三月三日第三種郵便物認可
昭和四年七月一日發行（毎月一回一日發行）

川柳雜誌

第六卷 第七號

川柳雜誌社發行

川柳雜誌 第六卷第七號 目次

感想・評論

前後左右(四)　麻生路郎
句の觀照に就て　松盛琴人
萬よし　麻生路郎

研究・其他

苺の皿の前で　蛭子省二
川柳と學ぶべき手法　出口善治
月評　路耶・紋太
川柳類題索引(六)　山雨樓・ひろし・加香・欣女

BUILDING

もくぎょ　住田亂耽
夫婦喧嘩其他　松丘町二
おカネの句　蛭子生
愛　安西杏三
夏の茶腕蒸　高橋かほる
ひとり言　松盛琴人
町柄は中の中　大窪文芳
轉落の柳行李　植田湖舟
川柳家の事　西山玄々子
鯉のぼり　若井たけし
さけび　早筝恒子
首やがな　路耶生

一路集（募集句）

白痴　前田雀郎選
丸刈　安井ひろし選
指輪　中澤濁水・松盛琴人共選

奉迎川柳會　安井ひろし
萬よし當選祝賀川柳會　橋本二柳子記
各地柳壇
川柳書架
忙中閑（表紙）　柴谷柴舟
題字　小出檜重
飛燕往來　二柳子
杭全町MFMO　路耶
編輯後記

創作

近作　麻生路郎
川柳塔
中島鐵州
六角桂風
岩本素人
朝田新水
伊藤綠之助
松盛琴人
松丘町二
住田亂耽
高橋かほる
水谷鮎美
伊藤愚陀
岩崎柳路
酒井駒人
橋本二柳子

○

中澤濁水
奥田雪緒
島田翠峰
水田桐郎
中見光路
和田源坊
牧田普門
清水光風

粒々集

川村花菱
近作柳樽
富士野鞍馬
諸家

七月例會會

▼日時　七月五日(金曜)午後七時
▼場所　南區日本橋一丁目交叉點
北の辻東入　日本橋倶樂部
▼兼題「催促」三句
▼會費　三十錢
初心者の來會を大いに歡迎す

暑中見舞の廣告を募る

▽奮つて申込まれたし△
柳友交誼のため左の便法を設く。
▼一口　五拾錢
幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓。一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。
▽申込期限　七月十日迄【八日號に掲ぐ】

大阪市住吉區杭全町六〇三
事務所　川柳雜誌社
電話天王寺一一六七番
振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替を御利用の上「前金」に願ひます。(三錢以下の切手代用でも差支ありません)

近作

麻生路郎

無常とや猫も錦魚も死んで見せ

鯛焼けば鯛の臭ひが残る也

こども等の三味にも絃の三筋なる

食ふための仕事と見ねず玉突屋

一人ゐればすくすく立つた葱坊主

悠然と生きてゐ人に惚れてゐる

長崎博士の渡欧に

東洋の皮肉をもつてかしまだち

萬よし君の市議當選を歡びて

萬よしが男になつて店狭し

近作柳樽

路郎選

眼ざむれば床の椿の落ちてゐる　金澤　同
麩も投げず緋鯉へ唾を吐く春よ　木偶人　同
双腕を伸ばせば夢に欺かれ　同　同
極狹い範圍のうちに育てられ　同　同
失望が消えて男を代にてゐる　同　同
遊ばせて食はす亭主へ着せてやり　松山　同
御詠歌の節も革新派が生まれ　文芳　同
ポスターに春は今年切りのやう　同　同
途々に萎む命の花を提げ　同　同
送金に飼はれる樣に生活す母　桑港　同
年の差は女蜂の樣に振舞はれ　敏郎　同
蜂蒭蒭望み少なう盆にのり　同　同

路郎光生が外國電報の檢閲係なりし記事に昔を思出して

電鍵の不平　局長佛なり　同　同
愛慾に燃ゆる瞳ぞ避けがたな　豊中　閑生
女中たち嘘の夫婦を敬遠し　同　同
メーデーを見に行きたいと出たつきり　同　同
目覺むれば直ちに修羅の巷にて　同　同

仲仕の子やはり仲仕になると云ふ　大阪　善治
親類は恩に着せつゝ利子を取り　同
顔役の聲から箸が割れて行き　同
來客に暖簾の奥で肩を入れ　同
久々に來た友達へ子があまね　松山　武子
お父さんの無い事聞かす七つ八つ　同
一人寢に蚊帳の匂ひのせまるなり　同
浴槽に大家の顔も浮いてゐる　大阪　吐句坊
足音を姉はフェルトで殺してき　同
滿腹の顔降りて來る段梯子　同
物ねだる女給肩から覗き込み　松山　青帆
鳳仙花賞めて女が借る便所　同
お寺への近道行けば蛇に逢ひ　同
勸誘員材料になる悔みに來　神戸　志郎
內緒金妻が脫がせる服で鳴り　同
邪魔がられながら本妻また孕み　同
花屋もう濡れる覺悟で歩いてゐ　大阪　豆秋
難波までふところ寒く見送られ　同
湯たんぽはあたたかいまゝ死んで居る　同
看護婦を笑はせて見る程になり　同
ゆくゆくは妹もまた人のもの　神戸　嶺月
氣ちがひのなにか言ひたい天を指し　同

鰻船の便所へ供がついて來る　松山雨眠
銀指輪死ぬる病と知つて居り　同同
女湯へ聞けよと節が改まり　同同
襠袍拔ぐ細さ白さの若旦那　大阪喜由
後添は達者ずん〳〵有卦に入り　同同
意地張りへ意見の通り荷が崩れ　同同
廿四五もう極つてもよいところ　松山玄々子
夜更しへ女房の皮肉ピンと來る　同同
油斷してゐる間に戀に食ひ込まれ　同同
晴着には未だ肩揚げのついてゐる　大阪醉亭
呼び込んだ屑屋の顏のいびつなり　同同
賴まれた兒を抱いてゐる重いこと　同同
第二乙父母だけはよろこべり　姫島觀月
坊つちやまと云はれて今年二十一　同同
信心へなんのかんのと金が要り　同同
硝子戸にしてからあけぬくせがつき　石川柳月坊
小使にきけば戀仲知つて居り　同同
貰ひ風呂いらぬ遠慮をしてあがり　同同
やけ酒と氣付いて藝妓三味を置き　島根專路
二階借景色ばかりをほめて住み　同同
まことまつた緣談髮結だけが知り　大阪青柿
ふと娘髮に手をやる藤の棚　同同
飲みなれて今日の肝油ちと多し　神戸市公

落ぶれて貸のあるのをよく覺ゑ　同　兵庫　無鬼
唇を許したやうに椿　咲き　同　同　同
前身は語りこむない蝶々なり　福岡　不忘
桃割れに棟上餅が飛び込んだ　同　同　同
交換手醉うてる人をもて餘し　金澤　今雨
さて來たが都に金も落ちてるず　同　同　同
叱るこ思ふなこ母の意見なり　同　同　空
祈る朝靜かに座る未亡人　大阪　悟
ミルク色公園あまり淋し過ぎ　同　同　同
お前には大金こ母きつこなり　同　柳　影
人生は井戸の釣瓶のそれに似て　同　同　同
おくびにも進物の少なかつたこは　石川　盜鐘
硝子越し春を見て居るペンのタコ　同　同　同
初旅へ宿のチップも聞いて發ち　大阪　勇　宗
二階借簾一つで夏にする　同　同　同
理想から理想に俺も四十二　同　卯　三
ふくれては見たが俺には勝目なし　同　同　同
可愛想なこだけ讀んで聞かすなり　岡山　暑　岐
工場からよりぐり程に出る女工　同　同　同
ホネムーン嗚呼忠臣の墓の前　大阪　不　然
聽衆をみんな無產にしてしまい　同　同　同
宮島に詣で一句
杓子丈置くに千疊も敷くこころ　久留米　光　哉

九州へ來てもお金が降らぬらし　同　同
紙屑屋皆賣れ〳〵の顏で來る　大阪　菊路
女房は又散髮を催促し　同　同
返したがよいかと指輪氣がもめる　愛媛　愛子
魂も身体も指輪まかしてる　同　同
湯に入ると手拭坊主作り居り　同　空山
彼の人が目にちらついて厚化粧　同　同
鉢使へば日給になる音がする　大阪　嘉月
よう言ふて呉れよに船は遠ざかり　同　同
尺持てば弟子叩かれるかと思ひ　同　沐天
孫一人舞ひなぞ仕込み樂しめる　同　同
背の子を車掌時々目であやし　螢ヶ池　大南
看護婦に讃美歌教へもてゝゐる　同　同
單調にあいた机へ足をのせ　大阪　山茶花
飴賣の阿呆に成つてよくもうけ　同　同
清貧に安んじますと働かず　同　洗車雨
喜んでゐる間に金を借りられる　同　同
病院へ濟まぬ櫻を三度見る　螢ヶ池　惠美須
素人の手品に子供欺されず　同　同
相談は己れが己れがの氣で揃ひ　大阪　秋刀魚
故郷の戀人せめて峠まで　同　同
雨垂れの音も淋しい施療院　螢ヶ池　柳月

饂飩炊くことも覺ゐた病上り　同　島根　花情

働けるのが幸福の綿ぼこり　同　同

二十二の意地にましろし豆畑　螢ヶ池　湖舟

から元氣出して見舞を喜ばせ　同　同

空　青々　と　友　の　足ごり

勉强をすればすると子を案じ　姫島　二竹

子を中に蒲團の柄の褪せて行き　同　同

恐ろしや算盤なんかはじくまい　近江　たけし

小康の娘指輪を二つはめ　同　同

花の色はうつりにけりな子が五人　但島　丁坊

なけきつゝ獨りぬるなり白髪染　同　同

老夫婦都に一人いゝ息子　神戸　郊村

いゝ髪をなぜて新聞讀んでゐる　同　同

子があればなごゝ玩具を見て通り　別府　晃卓

里心付いて土産を考へる　同　同

川柳雜誌五月號表紙を見て

茶が匂ほて來さうに思ふ興聖寺　大阪　壽枝女

犬の仔を門に遊ばしお張物　同　同

陽炎に似た戀するも十八九　堺　太路

解禁がごうのかうのと店は閑　同　同

上陸が分れとなりぬ旅の戀　大阪　桂枝

木二煉瓦の樣な五錢のパンで過ぎ　同　同

あらいやだと袂で電話たゝいてる　京都　愛子
待ちぼけは築港の笛たんと聞き　同　同
隣の子おあしをもてば客になり　神戸　可村
沈めても子の輕石は浮き上り　同　同
女の子醉うてる父を尻目で見　大阪　時雨郎
見るからに少年棋客こましやくれ　同　同
見て貰ふのだとも知らずに叔母の供　同　一舟
厄と言ふのは此の事か妻子病み　同　同
旅の風呂淺瀨を渡る氣味があり　神戸　柳川亭
傘さして小便に出る旅の宿　同　同
雨降りに出して氣の附く借りた傘　大阪　鯉友
何にしようかと氣の揉める鯛貰ひ　同　同
大掃除ほかす手紙に眼を通し　同　夕鐘
たゝかれて中座の前で連になり　同　同
之しきの事に考へておきまする　尼崎　吟女
逝きし子の樂書のあり去りがたく　同　同
團服の一人になるときたな過ぎ　大阪　狂雨
衝突をしそうにボート行き違ひ　同　同
東西屋火事にお客を奪はれて　京都　折草
木登りの子が畫火事を見て戻り　同　同
寢付かれぬまゝ故郷のこと母のこと　神戸　繁喜代
病床のまゝ子をよそに讀んでるる　同　同

電報々々うちかしら起きる　豐中　石竹

退社す

太陽はにくまず影のはうてくる　同　同

美しい家を燕が出入する　神戸　掬水

拍手してパイプの煙草こんでゐる　同　同

落魄れてゆけば犬まで忘れて居　尼崎　虚白

裏長屋みんなで配ける叺が來　同　同

蜂の巣の悲哀雀の巣の歡喜　島根　天絲

松江市にて

三朝節所望してちゝ風を入れ　同　同

行儀よくすわれば人にうゝまれし　兼二浦　花夢

夕闇の隅でにはゝりおさへられ　丸亀　ゆずらん坊

暗闘の渦中白紙ゝ云ふのが來　長野　高峯

白かべのこゝもボールを投げた跡　大阪　一柳

遠足に母の亡い子はおくれて來　金澤　たし路

摘草の土堤で我が家の方を見る　大阪　雪峰

失業者大きな指を持つており　神戸　九葉

音羽屋の法被を着たる衛生夫　兵庫　鬼逸樓

其の地位をほこりがましい顔なるよ　神戸　柳村

よかろうゝ行けば巣立ちの後なりき　和泉　向山

打かぎへ朝市の魚はね上り　松山　廣稔

色付いたゴールデンバットの指を見る　京都　與ち雄

行末が心配になり藝者惚れ　金澤　好次

賣れてゐる店へ隣の客のぞき　大阪　ひかる
飛びそうな小屋に鮮人生きてゐる　京都　繁坊
閔タクは捨て去つたやうに走り出し　神戸　迷亭
お土産で坊やの好きな人にされ　豊橋　綠雨
二三間先へ女を歩かせる　大阪　白柳
卷鮮を睨んだだけで醉うてゐる　松山　大鷲
たのまれた買物迷うばかりなり　愛媛　逢人川
竹馬に乘つた小供の帶がとけ　松山　計加
まあにゝですまして母は何うする氣　螢ヶ池　運坊
夏祭奥深くおく金魚なり　大阪　樂鳥
宿題も朝にあわてる花見時　螢ヶ池　詩草流
殘された療養書まで呪はしく　同　皎月
植木屋は雨を平氣で賣歩き　大阪　柳
生きてさへ居ればせめても孝行なり　螢ヶ池　地湧子
その着付けたゞの女でないと知れ　堺　清路
うづ高く積んで机のはかどらず　大阪　さだを
病人のふざけた揚句咳になり　螢ヶ池　波紋
交換手病める一人の母を持ち　鳥取　佳水
變こつで就職難が又續き　大阪　九萬人
娘の氣知らずや母は中へ座し　同　里十九
見習の只パンチだけよく光り　兵庫　香仙
女難なぞどうして有らう旅でなし　島根　キヨシ

丹のはげし柱に春日さして居り　尼崎　秀聲
帽こればオールバックの撫でる癖　鶴ノ荘　晋天
寶石こ言ふも歐亞の硝子にて　安東縣　花蝶
マネキンはさらされるのに飾りたて　朝鮮　東狂子
平凡な生活へ蠅が來てこまり　大阪　小六
十圓の女に出會ふ菖蒲園　堺　松風
郷關を出て圓タクの運轉手　大阪　しかぢ
お父さんだお父さんだよクッの音　同　丸葉
肩こ肩すれ合つてゐてはゞからず　大阪　沒食子
娘十六四十二番の吉こ出て　名古屋　草石
久々の母へ財布の底はたき　尼ヶ崎　健坊
大きな草餅母の手のひら　大阪　卜居
妹の子だよこ母に教へられ　別府　江新坊
殺されもせず痴話喧嘩濟んで居る　大阪　公二
驛員の目に美しさ丈け止まり　同　黒天子
新世帶小皿を二つ三つ增やし　大阪　幸泉
頼まれた兄へすまない娘にさせて　同　陽喜亭
久々の姪が女になつてゐる　神戸　卯生
殘品は型を變へて値も落し　大阪　明果
男の中で女一人は笑つて居　別府　豐泉
母親はあなた〳〵で父をよび　大阪　英賀夫

前後左右

（四）

麻生路郎

（六）

名古屋地方で大演習が行はれた一昨年の秋に小酒井博士を御器所町丸屋の宅に訪ねた。庭には秋草が咲き亂れてゐた。玄關の硝子障子が少しく毀れた儘で打棄てあり、その硝子戸には面會謝絶の貼紙がしてあつた。

體軀が悪いのではならうか、それとも探偵小説の執筆中なのかも知れないと思いながら、私は暫く玄關先に佇んでゐたが面會謝絶であつて見れば仕方がない。兎に角歸らうと思つて鶴舞公園まで引返へしたが折角こゝまで來て會はずに歸るのも遺憾だつたので恰度そこにある自働電話に飛込んだ。電話へは奥さんが出られた。來意を告げると「只今來客と外出しかけてゐるので、二時間ほど後に來て下されば」とのことであつた。私ば約束の時間に再び丸屋の宅を訪れ細長い感じのする應接室で會つた。博士の應接室は天井の高さまで書棚になつてゐた。

『實は主義者がやつて來て面倒な話を持ち出したので謝絶したところが硝子戸を毀して行つたのです。何んとか彼とか云つては出て來るので煩さいから遂々面會謝絶の貼紙をしたのですが、そのために大變御迷惑をかけてお氣の毒でした』この挨拶に『世の中では善意の第三者がいつでも迷迷をさされる事になつてゐますね。もつとお互がよりよき生活をするやうにつとめなければならないと思ひます』といふやうなことから、川柳についていろんな話がはづんだ。

「川柳家はなかなか仲がいゝんだね。當地では俳句の方は絶えずごたごたしてゐるやうだが」といふやうな話も出た。川柳家も俳人もごたごたすることに於ては變りはないがそんな問題には一切觸れなかつた。

『僕は歴史といふものを信じない。私自身が生れた時間すら正確に知ることが出來ないのだから』といふ話も出た。

『だから川柳の考證といふことも信じない』といふやうな意見も出た。『それは面白いから「川柳雜誌」にそれを發表して欲しい』と云つたら、川柳家は箇人的にすぐ突込んで來るからと、闇に某氏等のことを語つてゐられた。その後何か書くといふ約束だつたが、忙がしかつたり病氣だつたりして、遂々書いて貰へないうちに幽明境を異にされてしまつた。

歴史を信じない。自分の生れた時間すら正確に知らない。だから川柳の考證に對して信を措くわけに行かないといふことは嚴格な意味では云へるかも知れない。どこまで突込んだ意見が聞けるか樂しみにしてゐたが、今はもうそれを聞くことも出來なくなつてしまつた。

（七）

桑港の敏郎から『川柳雜誌』の三月號四四頁に

祝谷まんまる肥　吟
えた子が生れ

といふ句があるが、祝谷の讀み方と意味が知りたい。同じく四月號四七頁に

繼母とうまを合して肩が凝り
宿直へ淋しううまの合ふたこと

といふ句があるが、うまを合はせることはどんなことか說明して欲しいといふ手紙が來た。尤も此の手紙を書くまでには桑港の新聞へ問合はされたさうであるが、も一つ要領を得ないのでお願ひしたいと云つて彼の地の新聞に揭載された切抜を添付してあつた。

次の問答が、その切抜である。

（問）「川柳雜誌」に祝吟といふ題で祝谷といふ字がありますが、何んと讀むか又其意味を敎へて下さい。

祝谷まんまる肥えた子が生れ

（答）祝谷こゝも柳の芽が伸びる

前後の關係を見れば何んとも云へませんが「祝谷」は「ハフリ・ダニ」と讀むのでは無いのですか。「神官の多く居住してゐる地を「祝の群」なぞ云つてゐるからそんな意味から出たある土地の名ではありませんか。

私は此の切抜の添付された手紙を受取つて敏郎の句に對する研究の熱心さを知る事が出來て非常に愉快に感じたが同時に新聞社のこの解答を受持つてゐる記者が兎に角、何等かの解釋をしてゆかなければならないといふ仕事の少からぬ努力に敬意を表したのであつた。

こゝで私は小酒井博士が私は川柳の考證を信じないといふことに肯定すると共に又たとへそれが見當外づれの解釋であつても兎に角研究を重ねて行けばある程度の正解にまでは辿りつくことが出來るといふことも云へないことはないと思つたただ私は間違つたことを堂々と斷定してかかる考證家に恐縮するのみである。

祝谷が地名であることはアメリカに於ける新聞社で想像してゐる通りである。これは句を讀めば常識的にさう判斷し得られる程度のものである。たゞそれを正確に知りたいのが敏郎の研究慾なのである。今春、川柳雜誌社の松山支部が道後祝谷淺井冷々子方に生れた。上揭の句は夫に對する祝吟である。祝谷を何と讀むか、私も知らない。私は『イワイダニ』と發音してゐるが、固有名詞に同じ文字であつても處が違へば違つた發音をしてゐる場合もあるから正確なことは支部の方へ正してからでないと答へられない。

『祝谷ここも柳の芽が伸びる』は祖翁の辭世句と云はれてゐる『木枯やあとで芽をふけ川やなぎ』に端を發してゐる句であらう。次に『うまを合はして』の方に移る。『うま合ひ』は『甘合』であつて、氣性の合ひたる同志、仲のよき同志を意味する畿內の語であると『ことばのいづみ』が說明してゐる。繼子が家庭の平和を希ふために、氣性の合はない繼母に、氣性を合はして行くので隨分と骨が折れるといふ意味を詠んだ句である。

獨步は自分の小說が外國語に飜譯されても意味が解らぬことのないやうにといふことを頭に措いて書いたさうであるが川柳も出來るだけさうした心がけが必要であらう。

苺の皿の前で

——アリンス國辭彙のぬき讀み——

蛭子省二

私の好きな苺を賣りにくる。私の鷄舍前のは花が終りかけたところ。

鷄にあき新鮮な苺咲かせる

の句を得て幾日だろう。

五月上旬東朝紙で再生外骨翁のアリンス國辭彙のこと明白そうな廣告文と繪をみた時、局への序に申込むよう小妻に命じた其翌々日親味友松川兄から、手元に餘冊がある故贈ること恵まれたのは、痩浪人の私には恐縮と感謝が交々湧いた。無遠慮に御厚意に甘へる事にした。松川兄は『江戸往來』なる江戸文學研究誌を主宰して居られ、其の一冊として廓語考を發表された。文法上から組織的に里言葉を檢討された勞は多大なもので、私の樣な斷片趣味のものからは、全く思ひもつかぬ克明な研究だと驚いた。デ廓語考は繰返し讀むだのであつたが、幸に伯樂を得て辭彙に附載される關係になつた事は、兄同樣私も喜びとする處。幾回も轉載されて世に披め度いのである。廓語考には附錄に洒落本會話抄及川柳廓語集と云ふ古川柳が百五十句許り纏めてある。今度のアリンス國辭彙は、その廓語應用柳句を主として洒落本隨筆雜書から考證した外骨翁一流のうんとクダケた、然し香氣の高い學究的趣味本で、例により上等和紙仕立で挿畫の豐富なのは半狂堂外に類と眞似は出來ない。流石に圓本罵倒主唱者のお手前味噌丈けはある（實は私は圓本お有難屋で翁の御高見は未だ承つてゐない、多分此點では爭ふプロ資格を有して居る）即ち吉原研究の一部たる吉原言葉專攻の柳句詳解書で著者は例言に於て『本書中の柳句評釋は古川柳研究者の參考に供せんとして記述したものでなく、マダ古川柳を知らない人々に柳句の趣味を解せしめるやう初歩者を標的として懇切に評釋を加へたものである……傾城ナマリは單純であつて其語

意。其使途も尠凡であるから、これを言廻しの面白い柳句、穿ちの深刻な柳句に據つて解說したのである、ナンカンと牽強的の辯明がましい事を云ふよりも、實は吉原遊女の軟語入り柳句解であるのを　學書らしく美化して、アリンス國辭彙と題したものであると、アッサリ白狀した方が外骨式であらう』と再生に因る翁のモボ的合理化無抵抗主義の御挨拶である。

アリンス語の起原が、島原に由因する說は先方のノレンが古ければごうも腕押のしようもない。ヨロヅ吉原關係の書を引いても始まらぬ話ではあろうが、甲子夜話に駿府に二丁町ありて遊女家あるは人の知所なり。又東都の吉原町遊女の言葉は常人の異にして來れと云ふを來なんしと云ひ、嬉しく思ふと云ふを嬉れしおッすなど云へり、其の外にも詞の異ふこと多し、駿府遊女町の言葉全くこれに同じと彼の地遊女町に行きて聞きたる人云へり。然れば昔彼の地の遊女を當廓へ移されしと云ひ傳ふれば、今吉原町の詞は駿府の語言の遺れるなりと、こんな一節もスゲなく見捨てるには惜しい氣になつて、二丁町研究慾にそそられる丈けでも、考證癖の惡趣味には樂しみかもしれぬ。無論甲子夜話の說をその儘信ずる程のものではない。

かたわの中ぢゝ坊さんがようざんす　（二〇頁）

『不仁と書いてカタワと訓したのは、非人道の意でなく、不具の人といふ義に解したい　昔は人といふ場合に仁の字をあてて彼仁とか親仁なぞと書いた』そう云はれてみれば、此頃の書生さんの一番キラヒな論語に、宰我問て曰く、仁者之れに告げて井に仁有りと曰ふと雖も焉、其れ之れに從はんや云々と雍也第六にあつた筈、朱子は有仁と人に作るべしと言つてゐた樣だ、但し私は論語讀みの論語知らずだから之れ以上にはわからぬ。

座敷持親和とやらが書きんした　（二三頁）

『當時深川に三井親和といふ有名な書家があつて、自家得意の篆書を反物に染出して親和染といふを賣出させたり……果ては吉原の妓樓に入り込んで幅物……襦袢の袖なぞまで揮毫して賣名に泣々たる者であつたが、天明二年三月に八十二歲で歿した』こうベシャンコにやられては深川の親仁イヤサ親玉も面目玉をデングり返して居る事だらう。尤も理財の道には長けてゐたが廣澤に師事し禪僧東湖に就て修養もしたのだから、腹も出來てゐよう。諸大名への揮毫に應じたとすれば有福にもならうし、信心からの幟書き、アリンス國の花魁が傾城、傾國の美だとせば、よし　揮　に書いたとて今日の賣らむ哉書家の比でもなくはなからうか。そう〳〵東鄕元帥も何にかに書かれた話柄はある。川柳の惡口に一つもならなかつた事の德望は疑はれぬ、丁度王子町誌を讀むだ後だから、私はウント親和ファンになつて置かうゝこれ幸ひと曼魚さんの親和考を久し振りに頁を繰らう武江年表等には八十三歲とある。錦衞の達人でもあつた。

おがみんすようとはんぞへ顏を入れ　（三九頁）

『はんぞ』の『半挿』は楾の方をよくみてゐた。節用集にもあり。宇治拾遺物語卷十二、增賀上人三條の宮に參り振舞の事の條に『西の對の簀子につい居て尻をかかげて、楾の口より水

を出すやうにひりちらす音高く臭き事かぎりなし』と。

血を吐くおもひ半挿へ子を沈め

は松葉屋半藏の緣こせば、半挿がわかり易い。良安先生は也有柄半挿其内故呼曰半挿、今俗以耳盥爲半挿者非。と槐は俗字で所出未詳の由である。

たんぼ道火はありんすのおもしろさ　（一九頁）

『ありんす國の燈火が見ゐる、遊心翊々たる漂客に有眞天の快感を與へたであらう』となつて居るが、遊女の野遊かと思つて居た『町風に化けて一日氣をはらし』なぞの御親類句でなからうか。

拜みんすこは天人が云ひはじめ　（七三頁）

此の天人は遊女でなく、眞正の天女羽衣吟だと思ふ。でないと拜みんすが利かないと愚考される。

手がききんせんこめそ〳〵禿泣き　（四九頁）

『虐使されて寒氣に堪へぬ所を云つたのである』と全くそうともされる。が私は大門口の活劇と解したのが先入主で、今でも抜けない。

『禿と呼ぶのは、此坊主禿の頭がカブロ、卽ちハゲである形容を云つたのが起りであらうと推測して居る』と日本隱名、禿、かぶろはかぶるなり、髮をきりまはしてかうぶるなり。貞丈雜記に、髮を短く切りて結ばずして亂し置くを禿と云ふ也、平相國清盛入道童子三百人を禿にしらへて京中をありかせて己が事を惡口する者なぞを聞き出させん爲めに召仕ひし事、平家物語盛衰記等に見ゐたりと、主として女童にいふこは類聚名物考の說。

太皷持ありんす國の通辭なり　（一六頁）

『牽題と書き幇間とも稱する太皷持の語原は未詳である、太皷とは金遣ふ客を大盡といふに對したる名目なりとか。大盡（大神）を慰めるを以て神樂の緣を取て太皷と號し又末社と稱こか或は座のしめらぬ樣に執り囃すを以て太皷の稱ありなど諸書に見ゐて居るが、いづれも不徹底の說で首肯し難い。さりとて太皷とは是れ口をよくたたくの義とも認められない、謾ひ人を太皷たたきといふ如く、酒席の謾ひ人といふ義であらうか。又は男藝者が酒席へ太皷を持つて出た事か起原であるかも知れない』と。斯ふ云ふ事に不留意で過して居たけれ共、考證を見せつけられると語原研究の難事を思はせ、從つて諸說が出る所以であろう。毎日虛を云ふから大虛なりともあるが苦しい、松屋筆記に幇間を太皷持といふは、六齋念佛のはやしものより起りて念佛に節を付けて金と太皷の二つにてはやす、役割に金を持つものは太皷を持たず、太皷を持つものは金を持たぬよりいひ出たる俗語にて金持の遊興に陪して金を持たぬものが、そのきけんをとり、馳走するを太皷持といへりとなん。と温和叢書の標註者は此說の穩かなるに贊成して居らるる。異本洞房語園にはヘンな珍話を揭げてゐる。

主にあやかりなんすなと子を愛し　（五五頁）

遊女が私生子に對する言動との說を排して、翁は客が自分の子

を連れて登樓した場合『子を愛し』で『子を育て』でないと主張して居らるるに、私は敬意を表し度い。

附錄に『川留とおぬけなんしと女郎いひ』等品川へのアリンス國語傳播の句釋がある。南江驛話等々により實例も示されてゐる。婦美車紫鄙の九蓮品定に、品川驛は

此淨土は大てい吉原をまなぶ、しかしおよばざる事は外八文字、客を一人寢させる事、茶屋を脚亭さんといわざる事、人から尤次也、其外なんす、りんすの言葉つかひは、大かたちがはず、八ッ山に大門をたてたし

と、言葉遣ひの違はなかつた事は寧ろ味噌である樣に察せられる。

私はホンノ一讀したきりで　これから再讀三讀するであらうが、あやふきに近よらぬ士君子にはタッテお勸めもしないけれど、此珍書で趣味界の話題となるは火をみるよりも明かな事、やがて絶版本となつて唾涎者が續出するであらうを疑はない『先づ一本』を標語として翁數十日の御貢献に喜隨の涙を流す。

（五月十三日記）

川柳書架（廿五）

川柳一糸集

前田五健編著

△「編者の言葉」の一節を拔くと

故窪田而笑子先生の遺稿を蒐集して「一糸集」と名づけ編纂致しました。川柳界に二十何年活躍された先生の事故、此の外に尙澤山の玉稿があるだらうと存じますが、隅々迄手が屆かず、主として讀賣時代、媛柳時代のみを蒐めました。遺漏の多い事と拙づい編纂振りは御許し下さい。（以下略）

△昭和四年六月十日發行、發行所は松山市藤原五四七ノ一松山媛柳吟社、四六版一七〇頁、定價八拾錢

△柳壇の鳴雪翁と云はれた而笑子の遺稿集であるが、同翁に私淑してゐた松山の前田五健氏が、師を思ふのあまりに編んだもので、翁の句と柳文、川柳譜、その他を內容としてある。春雨、紫絃、水府、周魚路郎の諸氏の序文がある。一讀を薦む。

新川柳分類一萬句

近藤飴ン坊編

△序文に「火鉢と灰」といふ氣の利いた一文があるが永いから略す。

△昭和四年五月十八日發行、發行所は東京市日本橋區鐵砲町六番地磯部甲陽堂、四六版横綴、四九二頁、定價一圓五十錢

△新川柳を一萬句蒐めたもの、目次がやゝ見惡い、も少し工夫があればと思ふ。句の內容又は課題については飴ン坊式親切さをもつて編まれてゐる。初心者向き。

月評（前號）

路郎　紋太　山雨樓

近作柳樽　路郎提出

廢兵のニセとて片手ないものを

白水生

路郎……「廢兵のニセ」といふと世間では可なり慘酷な眼で、或る憎しみを持つて社會から葬らうとするものであるが、それがたとへニセであらうとも、片手のない敗殘の姿を眺めた時には、同情をしないではゐられないことに氣づかないのを悲しんだ作者の心持が、よく出てゐると思ふ。この作者の眼から見れば、片手をなくした原因が何であらうとも、既に社會からやくざ者として取扱はれてゐるのを、打ち捨てゝおけない人情の溢れを詠んだものとみることが出來る。

紋太……本當に流れ出る樣な言葉を以て句にされてゐる作者の暖い心持に、思はず引き入れられる感じがする。少しも云ふべき餘地のないいゝ句だと思ふ。

山雨樓……僕は一度通過した句であつて、成程味つてみるならば、作者の人類愛といつた樣なものが滲み出てゐることも受取れるが、句のあまさといふことが第一に眼について、味ひを稀薄ならしめる感なきやゝと思ふ。

路郎……僕もその句の甘さといふことには同感する。叙法の點よりみて何だかほんの僅かながら、厭味な所があるやうに思つたけれどこの句の内容が、それらの缺點を壓倒するだけのものがあると思つてゐる。

山雨樓……とても非難はありませんな、叙法にあまり技巧を弄せない所に、味つてみると効果を發揮してゐる樣に思はれる點がある。只此上作者の深刻味を要求するならば、さうした廢兵の悲哀に今一段の新しい見つけ所がなかつたものかと望む次第である。つまり「廢兵と片手」といふことは、一見常套的なつきもので、新味といふ點に於て物足らぬ所があるやうに思ふ。

紋太……それはかうした愛の價値に對して、夫々のちがつた立場から見た時に起る非難であらうと思ふ。僕はこの句が眞情を流露して、何物も顧慮しないで、出るがまゝに句を成したと思へる點に尊敬をする。

路郎……「廢兵と片手」といふことが常套的であるといふことを云はれたが、それが片手である事、片脚であること位、廢兵を廢兵として生かす手段は外にあるまいと思ふ。もつとも力強い材料を取つてきて、それを表現するに越したことはないが、この句の主眼が人類愛に在つて、片手とか、片脚とか、片眼とかいふ他の材料の變化に依つて、左右される底のものではないと思ふ。月の美感といふやうなものが數千年の昔から人類の肺腑を貫くやうに、この場合の廢兵と片手の問題は、如何にも常套的である樣ではあるけれども、それは動かすべからざるものを摑んでゐるのであるから、これでよからうと思ふ。

紋太……僕もその通りに思ふ。常套的ではないかとか、つきすぎはせぬか、といふ心配は作句の場合殊更するには及ばぬ。

山雨樓……偶然にも僕は今日、役所の二階から何氣なく電車道を見下してゐると、この廢兵が（片脚ないもの）松葉杖を賴りに急いで歩いてゐるのを見受けた。その歩きつ振りの巧妙で迅速であることに、思はず涙を催した

様な次第であるが、その廢兵の歩きなれてゐるといふ着想について、この場合を比較するならば、廢兵といふものゝ見方に、多少とも尖鋭化されたものがありはせぬかと思ふのである。無論この句の場合は路郎氏が冒頭に述べられた如く、ともすれば廢兵を冷視しがちな風潮から、一歩突込んだ心持を現してゐるもので、その心持を見方に於て捨てがたいものなることは、云ふまでもないことである。

山雨樓　提出

發育不良の子を持ちて

醉へばとてふと胸をつく子がひとり　志郎

山雨樓……云はゞこれこそコモンヒユウマニティそのまゝの想で、格別の新しさもないやうであるが、見逃すことの出來ない句であると思ふ。或は短歌の捉へさうな句境でもあるし、その方でよりすぐれた表現形式を持つてゐるものがあるかも知れぬが、作者の僞らない心持が、眞實の力强さとして、ひし〳〵と迫つてくるのを拒めない。

紋太……僕も同じ樣なことを云ふ樣だが、冷酷に云へば平凡を免れない。丁度甘い新派劇などを見ても子別れとか、親子對面とかいふ樣な局部的に涙を催させる場面がある樣に、この句から親心といふ點に同感を持つことが出來るだけである。この作者が實際に酒すきであることを知つてゐる僕は、この句が全く作りごとでないといふことを第一に感じさせられる。それで句としてはあまいけれども僞らずに心持を述べた點に、惹きつけられるものがある。

路郎……私も紋太氏の説に同感である。この句は作者の親としての愛が大きいにも拘らず、それを十分に盛りきれなかつたといふ憾があるのである。餘りに大きな悲しみにぶつかつた時に泣けない樣に、內容そのまゝを正直に出したので、それだけの値打はあるけれども、第三者にその大きなものを、そのまゝ渡す力が足りなかつたのである。それからこの句に就いて、もう一つ云ひたいことは、前書があるから、發育不良の子供の句として受取れるけれども、若しこの前書がなかつたならば、極道息子、も少し小さい子供であれば、不良兒を持つた親としての句に受取れると思ふ。この點この前書が、その眞實を生かすために、眞に役立つたわけであるが、前書がないために、句の意味が多少不明瞭であるといふのでなくて、意味を違つて取られるといふ場合には、その作品にどつかに缺點があるのではないか、といふ疑問を持つたのである。それについて諸君の意見が伺ひたい。

紋太……その通りに違ひないと思ひます。併し作者の側にのみ立つて云へば、この句で思ふまゝに云へてあるわけで、これでよいのであるが、第三者は作者の實感如何に拘らず、句として完全に鑑賞するに堪へるものを求めてゐるわけですね。

山雨樓……前書に依つて句の意味を一層はつきりさせる、といふよりか、前書があるためにやうやく句の意味が普遍する、といふやうな場合にあつては、たとへその句が、第三者の共鳴を得たとしても、完成されたものではないと云へるだらう。併しこの句の場合の前書は氣の毒な發育不良な子で、作者の感傷を酌みとるべく役立つてゐるが、よしこの前書がなく、從てどういふ不肖の子であるにしろ、作者の心持は、ある程度まで酌みとることが出來るのであつて、たとへ前書がなかつたとしても、完成された句と云ふことが出來ないこともなからう。一体川柳が第三者の共鳴に訴へるべく、餘りに効果的な手法を選ぶに急なるがために、兎にも角にも、突飛な或は奇警な着點を求めやうとしてはゐないか。勿論題詠とか、興味を主とした川柳に在つては、免れ難い經路であらうし、そこにまた面白味も加ることであらうが、我々の氣持を我々自身が振返つてみて、句としての創作慾に驅られた時に、僞なく是を表現することは我々の生活記錄としての川柳と云つた樣な立場から尊重しなければならぬことゝ思ふ。そしてその表現上の技量を磨くやうに心掛くべきではなからうか。

紋太……つまり句のために句をつくるか、人のために句を作るか、といふ問題から考へると放埒でない程度に、かういふ句を僕は歡迎

したいと思ふ。

路郎……僕もこの句に對して、作者はこれでよいと云はゞ、それでよいとして受け容れられる句だとは思つてゐるが、慾を云へば、發育不良の點を何かに依つて句に表したならば、一層句がはつきりして來はしないかと思ふ。此子供は五つになつても、まだ歩けない狀態の氣の毒な子供だといふことであるから、例へば「醉へばとてまだ歩けない五つの子」或は「醉へばとてまだ歩けない五つの子」といふ樣な叙法を採つたならば、前書がなくても、それが句の上に發育不良を表してゐて、親の寂しい氣持が出るのではないかと思ふ。もつとも私の例句は、突然に詠んだ句であるから、その點を十分に出し得られたといふのではないが、さういふ行き方であれば、他の意味に取られることだけは免れるであらうと思ふ。その點からさき程の樣な質問を出したわけである。

紋太……その通りですね。前書に輕りすぎて句作をおろそかにしたと非難されても、仕方がありませんね。

紋太　提出

番臺へよく〳〵眠い下女を置き

雨　月

紋太……古い氣持のする句ですね。番臺と眠いといふことは、常套的な見方であつて、又下女が番臺にゐるといふことも、何だか不似合な樣にも感ぜられるが、全体的に云へば、見方が古いといふことを突破して、兎に角にも面白い。又事實を否定し難い樣な感じのある句だと思ひます。古いと思ひながら面白いと感じるのは、どういふものでせうか？面白いといふのは私だけでせうか？

路郎……古いと思ひ乍ら面白いといふのは隙のない寫生句の力强さだと思ふ。

山雨樓……この句について、川柳雜誌一月號の川村花菱氏の「社會批評と人生描寫」の中に、柳樽は社會批評である、といふことを述べられてゐるのを思ひ出します。「成程寫生句としてよく表されてあるし、作者の觀察した社會相といふものが窺れるが、それ以上に期待することの尠いのを遺憾とする。勿論かういふ句境も、川柳の一端として、時に興味ある觀察と思ふが、如何せん、その小主觀の餘りに見え透いてゐるといふ非難が免れ難い樣に思ふ。尙花菱氏の云はれた柳樽の精神は普遍的批評、客觀的觀察といふことに、主眼點があるのであらうが、ともすれば今云つた如き小主觀に陷り易い缺點を多分に持つてゐるといふことは、心すべきことであらうと思ふ。

紋太……僕もこの月評會が、推稱すべき句を提出せねばならぬのであつたら、この句は出さなかつたかも知れない。併しこの句には面白味と、平易さと、氣易さといふ樣なものを多分に持つてゐるので、さういふ氣持を捨て難い。僕は、さういつた氣持も川柳には持ち得べきものであつて、只それにしつかりとした心と眼を持つて、句にする自覺の上に立つてゐさへすれば、それでいゝであらうと思つたから出したわけである。

山雨樓……或る人は詩について、詩とは意味を主張するものである、といふ樣なことを述べられてゐるが、かりに川柳が我々の精神生活に役立つものであるとするならば、素より多分の意味を要求せねばなるまい。といつてあながち警句めいたことや、皮肉めいたことのみを覗へといふわけではないが、一句を味つた心持に於て、何物かを考へさすといふ底の川柳を望むことは、許されてもいゝだらうと思ふ。興味と云へば興味だが、さういふ方面の興味が、より意義的なものであると云へないことはなからうか。

路郎　提出

人と鰯鰯は油したゝれり

平　八

路郎……僕はこの句をみると、今の世の虐げられてゐる人達の生活を思はされる。何だか左翼の人の叫びをきいてゐる樣に思へる。近

頃稀にみる鋭く突込んだ句である。佳句として推稱したい。

山雨樓……前の句で述べた川柳に意味を求めるといふ考へ方からこの句をみる時は、今路郎氏の述べられた樣な、鋭い主觀がみなぎつてゐると思ふ。只上五の「人と鰯」とおいた所に、も一つ明確を缺ぐ所がありはせんかと思はれる。恐らく一人者が鰯を燒いてゐといふ樣な句境を述べたものであらうが、さうだとすれば、も少し敍法に用意がありはせんかと思ふ。

路郎……この句は、さういふ場面を想像する事は不必要であつて、人と鰯の對照、即ち人と鰯を同じ俎上に上してきたのにある。鰯は油がしたゝつてゐる。人間は油さへしたゝる餘地のない程虐げられてゐる。そこに此の作者の強い人生觀が描き出されたのである。

紋太……僕も山雨樓氏の解し方には同意しかねる、僕の境地とこの句の境地とは、非常な隔りがあるやうに思へる。胸襟をひらいてこの句は親しく僕に語つてくれない所がある。だから僕は敬遠して、お二人の說をきくに止めたいが、只僕の感じだけを云へば、この句は險惡な皮肉ではないかと思ふ。恐らくその皮肉だけの句ではなからうか。

山雨樓……大きな皮肉はあるでせう。又鰯の油を拔くといふところに、少からぬユーモアもありませう、だが鰯を燒くことを感じ入つた作者が、人生の何物かに觸れたとしてみれば、そこに盡きせざる味ひを藏してゐるのではなからうか。上五の敍法について路郎氏は場面のことを表してゐるのでもなく、又それを穿鑿するの要はない樣に云はれましたがこのまゝでは餘りにだしぬけで大まかで、措字宜しきを得ないといふ非難は免れない樣に思ふ。

路郎……上六字が突然で大まかだといふお說であるが、それであればこそ、この句が潑溂として生きてゐるのである。この「鰯は油したゝれり」といふのも、是も必ずしも鰯を燒いてゐるから、油がしたゝつてゐるといふ樣な穿鑿的な解釋は、この上の「人と鰯」と突然的に投出した表現に對しては、當を得てゐないと思ふ。人と鰯との對照に、人生の暗澹たるさまをみせるために、鰯の方はぎら〳〵とした油がしたゝつてゐることを述べたのである。

紋太　提出

子を見たいとは女房のことだらう

漠々

紋太……この句が僕にははつきりと來ないのです。

山雨樓……僕は平凡に取りましたがねえ。

紋太……つまり子をみたいといふのは、實は女房を見たいのである、といふ意味ですか。

山雨樓……えゝ。

路郎……これはつまり男だけが他國にゐて一度子供がみたいと云うた時に、いやさうではなからう、その實女房が見たいんだらう、と揶揄された句を解したらいゝでせう。海上生活者などにはよくある例だと思ひます。

紋太……それにしても敍法に物足りぬ所がありますね。

川柳塔　紋太提出

石に松植えやうと母は縛りつけ

鐵洲

紋太……母の句はよく見受けますが、こんな突飛で面白い、その實如何にも平凡な實際を思はせられる樣な句は、餘りないと思ふ。

山雨樓……僕はよく解りませんねえ。

紋太……僕は深く穿鑿をせずに簡單に、小松を石に植えつけ樣として、土と一緒に母親が縛りつけてゐる。不可能な樣なことで、實際によくあることを句にした點を面白いと思ふ。これを考へ過ぎて、息子の自由を束縛するといふ樣な意味にとれもするが、そうはとりたくない。

路郎……紋太氏の說明で十分盡してゐると思ふ。素よりこの句が、息子の自由を束縛す

る樣に解することは妥當ではない。そこ迄考へたならばこの句は死んで仕舞ふ。そのまゝに考へて、それで十分である。

山雨樓……今晩は 川柳と意味といふことについて、度々話しましたが、この句については甚だ意味を捉へがたい樣に思ひます。紋太氏の云はれた樣な場合が、かりにあるとしてその母の心持は一体何を齎すか、興味としても索然たるものであり、紋情味としても稀薄なものではあるまいか。兎に角意味を酌み取るのに困難を覺える程の澁晦さである。

紋太……よく凹みのある岩石型の石に、小さい松を植えてあるのは、よく見受ける情景だと思ふ。とにかくそんな事をしやうとしてゐる人間の營みと、それを靜觀してゐる息子の姿などを思ひ浮べて、僕には興味の盡きない句である。

路郎……山雨樓氏が 意味といふ事を云はれたが、そしてこの句にある意味を見出すことが出來ないと云はれたが、この句は母の自然を愛する心から親子の平和な生活を樂々と描き出してゐるところに 意味があるのである。石に松を植えるといふことが、最初に紋太氏が云はれた樣に、あまりにありふれたことであり、而も何だか奇拔なものを捉へた樣にも見えるのが、面白いと思ふ。私は此の句を巧みな發見として受け入れるのに吝さではない。

山雨樓 提出

一生のどこでつまづくことやらん

翠峯

山雨樓……翠峯氏は久しく 病床に呻吟してゐられたさうですが、この程退院され、その健吟さを再び見せて貰つことを喜びます。僕も昨冬、思ひがけなくも重患に襲はれて、かう云つた心持を、しみ〴〵と味つたのであるが作者のつく〴〵と感じた眩きとしてその氣持を酌みとる事が出來るのみならず、どうしてもかう云はなくてはゐられない瞑想を、そゞろに受取ることが出來ます。

路郎……非常に大まかに纒められた一句であるが、作者のしみ〴〵とした心持が描き出されてゐて、巧みな句である。

紋太……僕も別に異論はないけれども、鑑賞者の慾から云へば、今少し句としての洗練さが欲しいと思ふ。このまゝでは其の儘過ぎはせぬかと思へる。

山雨樓……作者がかう詠はず にはゐられなかつた心持を尊ぶのであつて、之を常識として受取ることは酷だらうと思ふ。兎に角本當の心持を詠ふといふ所から出發して、或は深い物に或は鋭いものに作り上げる。そして自分の思想なり、感情なりを陶冶し、同時に句としての洗練を心がけるといふ行き方が、何處までも尊いものであらうと思はれます。川柳としての面白さや巧みさに、興味がつながつて伸くならば、それでもよからうが、我々の本當の魂の叫びとしては、興味本位のものに引きづられてもゐられまいと思ふ。つまり句作の心持にも、時にかうした出直し方を試みることも、意義のあることゝ思はれます。

路郎……つまりこの句の有難さは、自己反省にあると云へるでせう。

紋太……ですから僕も その點には頭を下げてゐるのですが、句としてのみ云へばこの感想はありふれた程度を出てゐないと 思はれる。（町三筆記）

◇新誌友

本誌普及のために愛讀者各位の御盡力によつて益々讀者が增加してまいります。本春から御紹介者と新誌友の御芳名を本誌に掲げて その御好意を感謝してゐる次第です。

何卒此際 意義ある川柳雜誌の倍加運動を起し 讀者一人が一名の新購讀者を御勸誘下されるならば 本誌はより良き川柳雜誌となりますから川柳家に限らず社會一般讀者の御紹介を願ひます。見本として 川柳雜誌をお送りしますから御申込下さい。

「川柳雜誌」半年分前金金壹圓八拾錢以上拂込みの讀者を誌友としてこゝに芳名を錄します。（四年六月十六日まで）

福田久、梅村道男（麻生路郎）佐久間折草（丹波太路）村井多喜女、森東魚、山本藤太、谷殿元禧、小山きん子、平澤遜、坪井湖南、丹波太路、北澤袈裟雄、廣渡不志（本社事務所）

（括弧内は紹介者）

萬よし

路郎生

一

万よしは自分の鼻を評して『偉大な口徑を持つ圓形な鼻腔は小指や中指で封鎖することは出來ない。拇指をぐつと詰めるとやつと一ぱいになる面積を持つてゐる。外壁が薄いので俯向き加減になると人樣に目立たないが、仰向いて哄笑すると偉大な口徑を對手に開放して照準誤らずんば敵をふき飛ばしたり、鼻であしらうことが出來る」と云つてゐるが、その偉大な口徑を有する鼻が市會へ乘り出して、對手構はず、吹き飛ばしたり、鼻であしらつたりするのであらうことを想像すると、ちつと椅子に凭れてゐられないほど、をかしくなつて來る。

川柳家の中には　その鼻が大きいだけでなく、こよなく〳〵と高くなつてしまつて、川柳を忘れてしまやしないかと案じてゐる人があるので、少しく万よしを解剖して、その然らざることを云ひたいのである。

万よしの鼻は今後ます〳〵幅員を擴大して偉大にはならう。が、決して尊大になつたり、高慢ちきになつたりする素質はもつてゐない。彼の鼻は至つて平民的な鼻である。しかも一脈のユーモア味さへ漂はした鼻である。彼の鼻のおどけた姿は、彼のあはて者であることさへシンボライズしてゐる。

彼の鼻は市會議員となつても決してそのために他人を見下したりするやうな鼻ではない。市會議員にならなくとも氣に入らぬ奴はつまみ出す位な氣概は持つてゐたのであるが、彼の主人公の商賣柄を考へて、なるべくつまみ出すやうなことをしなかつたのに過ぎない。しかしながら對手によれば偉大な口徑を解放して鼻であしらう位なことはやつてゐたのである。彼の主人公がたま〳〵市會議員になつたところで、主人公が急に偉くなつたのでもなく、彼の鼻が急に偉大になつたのでもないことは云ふまでもない。

それは彼も、彼の鼻もよく知つてゐることである。もし世の中にそんなことを考へる人間がゐるとすれば、衣裝をもつて直ちにその人間の價値を斷定せうとするに似て、全く採るに足らぬ話である。この鼻の持主たる彼万よしは今でも一上燗屋のマスターであり、一川柳詩人であることに變りはない。たま〳〵一市會議員となつたために、急に彼が偉くなつたなどと考へられることはまことに滑稽でもあり、彼のために甚だ心慨でもある。彼が若し眞に偉い人間であるとすれば市會議員になつたからとてこれつぱかしも偉さをつけ加へたとは考へられない。それよりも人間としての偉さは彼萬よしが一上燗屋一川柳詩人として堂々と生きて來たことにあるのである。（つゞく）

川柳塔

○　中島鐵州

一割はごうでも欲しい資本主
立候補してはも他人なればこそ
株式にして借金を消す積り
汽車の戸を締めてたあれも來ねばよし
湯上りの父に苦勞の消へて居ず
宣傳のビラで子供の鼻をふき

○　六角桂風

居候用事をさせて欲しいなり
すきやきで歡待したと思うてる
奥さんと言はれ教師の妻は老け
新世帶一人になればなにか縫ひ

休職

建玉はないが夕刊待ち遠し
内職でなし鶏の一羽二羽

萬よし氏當選

これからの大阪市をばごう仕様

○　岩本素人

警察の時計と合はす氣になれず
納涼臺オールドミスの冷い手
貰ろた子もなつかず募るヒステリー
何言はれても怒らなくなり髭を抜く

寢て考へた事は浮世の間に合はず
形式を變へて賴んで見たけれど
浴衣着て借りのあるのを思ひ出し

○　朝田新水

東　京

東京を去るに戀しいバルコニー

日比谷公園

繪葉書で見た噴水のしぶく音
七荷に縮め本宅を出る
嫁ぐ身の綺麗な街の灯はながれ
私生兒と知らずに眠る枕蚊帳
不平なく皆座蒲團は敷いてゐる
家族湯のタイルは白し肌白し
お通夜してきてお通夜してもらふ

○　伊藤綠之助

天井が何か言ひそな夜の梟
民衆の渦ともなつて海に出ん
人生が何んぞビールの泡を吹く
小理窟を言ふなと思ひ茶を命じ
螢狩り從妹といふを連れてゐる
さはあれど勝氣な母の目のくぼみ

鳥打を求めし友に

鳥打も似合ふ鏡に朝はよし

○　松盛琴人

江戸ッ子に會へば江戸ッ子甦り

稔君病む

病院で青葉になつたのも知らず
葱坊主清玄といふ立姿
病んで見れば人とは弱きものなりし
工場地こゝは枯木の世界なり
聽きに來るほど善良な有權者
かつと晴れた川で葭戸が洗はれる

○　松丘町二

平然とサンドキッチは抱き合つて
深呼吸へ山がうむ！と答へた
女給さん手の表情がまづいのね

大阪

廣重の昔に還る空ならず

○　住田亂耽

蝙蝠傘をひろげし音のものうかり
ドアの鍵ホテルではもう公然と
ひともし頃の話猫が踊るさうな
アカシヤの並木とぎれた所に住み
掌の中に幾萬圓か消ね

中年の戀に靴なご光らして　岩崎柳路

○洗髪素顔の相がちゝ變りウエトレス今頃歸る面白さをなごは居らんかゝ御前樣のお呼び無意識に女は酒をついで立ち取持つた持たぬで檢番畫をもめコンダクター後姿ゝ髪の艶御不在中につい妻君ゝ話し込み八ツ橋がもう堅さうな母の年トンネルで聲一杯に話すなりつばくろに働く事を敎へられ奥座敷蚊帳の釣手の音を立て

萬よしさんの當選を祝す

胴上げに萬よし老の重い事　酒井駒人

○ネクタイに若さを見せて社の歸り母だけが無口の姉をよくさつし胡瓜揉み又聞される妻の里蛇を見て早目に歸るピクニック赤飯をそへて体温計返し

胴上げに屋上くろい街が見ゐ　ある人へ

酒の哲學を聞かされながらのみ　高橋かほる

○苺の赤さ眼鏡が曇る其苺誕生近い子が握り藏の戸を開けて母親せきをする魚屋に夫婦は顔を見上げられ　水谷鮎美

○さびしくも父は枕をおちてゐる渴仰の物を言はない顔になりおかしさは五十の坂の子が戻り人生の壁に向つて衰へる働いた金だお前も取つて置け娘の肩の赤き糸屑つまゝれる嚙みきれぬものに乞食の齒を見せる花びらをかゝへて落ちた雨蛙　伊藤愚陀

○時々はけたをはずしてみるゝ言ふ難波橋ぬけた二人の肩ゝ肩倉のすみ倉の隅から死がよせる

○　橋本二柳子

乳母の子になるのやさいふ女の子
頰骨をおさへ今年は三十八
汽車辨ばかりで疲れてゐるなり
制服制帽に友達見付からず

萬よし君の市議當選

祝盃の中に萬よし少さすぎ

◇　中澤濁水

染め直しこつちも賞めて値を拂ひ
暇乞ひ電氣へ頭突き當り
たま〳〵の早寢へ屹度客が來る
出産は早速息子知らせて來
百姓の一服牛も草を食ひ
興業が隣で女房落ちつかず
嘘の裏かいて商賣面白し

◇　中見光路

無雜作に金魚番ひにされて賣れ
質やから宣傳のくる青葉ごろ
いれ尺のたゞ一寸に女氣の
お櫃なり貸して呉れるも隣なり
惡緣のやうに連結發車する
その頃の母の造つた細工もの

◇　奥田雪緒

毎日のやうに入院炭を買ひ
まばゆくもない飛行機へ手をかざし
面當に足してもつれた凧の糸
ネクタイ屋味方になつて柄をより
愛の巣も近く自動車坂となり

◇　和田源坊

なぜ僕は世繼ぎの娘のみ想ひ
今日もまた大1號とすれちがひ

禁煙

紫の烟り妖姫の如く來る

◇　島田翠峯

病めばたゞ働く人が恨らめしき
損のない客へ茶菓子を買ひに行き
病院の門で泣き出す男の子
淋しさはいつ酒飲んで醉ふのやら
急用に來ていさゝひの小半日

◇　牧田普門

施療院さゝいな事に叱られる
三越でせめて十圓ほしいなり
醫者なんぞいらないやうに伯父は肥ね

◇　水田桐郎

朝顔を呉れたはよいが無心にて
つばくろの聲に病人むきをかへ

◇　清水光風

街路樹へ夜の女になつて立ち
病人を見舞がてらに債鬼くる

粒々集

東京　川村花菱

赤こんぼ晴れを嵐の風が吹く
白足袋の間をおしやく黑いすね
賑かな告別式も暮れにけり
いた〳〵し美しつんつるてんの處女
金策の道で師走の髪結床
かりたての頭喰べられないはなし
東西同じ身振りで兒がつゞき
大晦日回讀會の「ポトトギス」
大晦日京菜のくきが齒に殘る
元日の自働電話に人が居る
女が出來て白銅が入り
思ひ出はみかんのこける歌がるた
新モスの青さ初荷の馬の鼻
人孺の襟をのそけば肌襦袢
すや〳〵と寢る女房を伏し拜み
十六の病氣娘のなまぐさき
年齢のない女小料理屋につとめ
常ならぬ感じ女房足袋をぬぐ
鯛の顔のほせ上つた氣味があり
待つ電話女は足で足をかき
あきれ返つた口に鬼灯
銀行の守衛鏡のやうな靴
不見轉のごこかよごれて美しき
退院の一ッコハゼがはづれて居

東京　富士野鞍馬

發車ベル驛長姿の尻を押し
懐ろのいゝ姐さんのもう翡翠
土方今日休んで醉つて夜を出る
青い顔マスクはいつそ氣がくさり
廣告の一字田植の邪魔になり
汽車中を汚してゆで玉子剝け

句の觀照に就いて

觀方を誤られしより生ずる句の損失

松盛琴人

句を觀賞するに當つて其評者の觀方によりては甚だしく句の價値に高下を生じるものである。殊に誤られ易い句は内容が二樣にとられるものに多い。斯ふした觀賞の相異は澤山川柳誌上に爭はれてゐるが先づ之が重な原因は何であるかを突留めたいといふのが私の考へで勿論是には色々多くの原因は在るが先づ究極する處は文字が無い、言葉が無いといふに一致すると思ふ。之は高い藝術を生むといふ點を目標として惱んで居るものであればさう言へるのである。今茲に述べやうとする事は其他の原因を二三摘記して識者の教を乞はんとするのである。

あまりにも聞わけなさを抱き締める

此句は近作柳樽にも選句され又母性愛を詠むだものとして讀者の一人から賞讃された句であつたが此句を母性愛と見る事は別に異議はないが果たして母性愛としたら此句の生命は平凡化しはせぬだらふか今私の云ふ平凡化とは類句や同想やより以上の佳句が餘りにも多く是迄に在るといふ上に於て古い想ひとなります。若し或る人の觀方が之は若い者同志の濃艶な戀の一シーンと見た時はどうであらう前者の觀方の母性愛といふよりも新鮮な感じを受ける丈けでなく戀愛のクライマックスに達してゐる情景が髣髴として浮び出て來はしまいか。許し許された戀仲の小さな我儘な爭ひ位は反つて戀の熱度を高めるばかりに役立つものでさうした戀の焰は戀人を抱き締めて燒き盡さねば止むまい。其は安珍に對する清姫の如き

熱的の戀愛である。熱い〳〵息がかい皮膚から發散するやうでもある、此作者は實際の體驗を詠つた事を私に告げてゐる此句は幸にして觀方によると高下の差は餘りない樣であるが次に述べるものは非常な差違を生じる處であつた。

愛の巢にたまには駄々もこねてゐる

句は前の句より非常に落ちるが構想は同じで作者は今少し若い別人である。勿論此句は暗合で前の句からヒントを得たものでも何んでもない實際そんな句は知らぬのであつた。此句は或る席上の、題詠で此句の題を出す以前に子供がたゞをこねるといふ事を作句すべく『だゞ』と出題されたのであつた。然るに此句に打突つた時選者に手供といふ概念が先入主となつて、勿論多くの句は子供の事を詠じてゐたのでもあるので不用意にも愛の巢に駄太をこねる小兒があつては古巢だと危ふく此句は捨てられんとしたのである併し幸に句の構想を見直されたので、適當の處に選されたが觀賞する場合斯ふいふ誤解もある。句を觀賞する場合觀方の相違に認識不足もあり、疲れて見落す事もあり、獨斷も隨分有り勝で左うした原因が飛んでもない誤解をして句の價値に非常な高下を付けて終ふものである。

何處へ行く大阪驛の人人人

此句は月評で盡されて居るから改めて云ふ必要は無いと思ふが若し此句の『何處へ行く』を極く平凡な考へ方で見ると それは實につまらぬ寫生句で一顧の價値もないものになるであらふ。併し何處へ行くは疑問詞であり人生の行路へ問ひかける言葉であると認識されたら其處に何者かを連想なし得る筈である。よし又それ程でなくても何處へ行くの一語の詩味は又全體のリズムの上からでも『愛の巢處か古巢だ』と一言口に云つて退けるやうに、評者の創作によつて此句に價値が生れたので、左もなければ生命なしと斷じるやうな戸迷ひはせぬであらふ。

序であるから句の價値判斷は他人にも自分にも出來得ると云ふ立場から述べて見るがもと〳〵むづかしい事を言はんとすれば、一の符諜でしかない言葉といふものゝ不完全さが充分自分の意志をさへ他へ徹底せしめる事すら出來ない位のものを僅か十七字内外の短詩形へ詩としての本質を盛り込まんとするに概念や散文でおぎなつたとて充分に說明されぬのは當然で其處に詩を解する詩眼が必要である理想の境地にある高い藝術は認識不足では判りかねるものである。

合本と殘本

本誌の合本が總布製美麗表紙附（金文字入）で書架を飾るにふさわしい簡素な裝幀に出來ました。

第一卷及第二卷　各金五圓也
第三卷及第四卷　各金參圓也
第五卷昭和參年分　金參圓也

尙古い川柳雜誌御入用の方には特に左の値段でお頒ち致します。いづれも下記宛御申込下さい。

自二號至四十七號　各一部　金拾錢
自四十八號至五十九錢　各一部　金貳拾錢
（但し一號九號廿一號廿五號廿六號廿七號はありません）

川柳雜誌社事務所

川柳と學ぶべき手法

出口善治

（一）

静物畫を描く場合、例へば林檎を描いただけでは良い繪にはならない。それにバックを着けテーブルも描き或ひは傍へ小刀のやうなものでも添へて始めて繪が完成されるのである。つまりこれによつて路傍に轉がつてゐるのではない、室内にあるのだと云ふ林檎の在りかが明かにされたわけである。

表現主義と云ひ印象派と云ひ、新しい文藝運動が多くその端を繪畫の理論から發してゐる如く、この林檎の繪をより引きたてるために描かれた背景も又文藝上應用し得る重要な一手法であると考へる。すでに番傘の小太郎さんが、このことを川柳に於いて主張してゐる如く我々初心者にとつては大いに研究する必要がある。

心中へ夜明けに近い鐘が鳴り　　蝸牛

心中の噂に濱の朝が明け　　陽氣亭

これらの句はいづれも讀者に一つの舞臺面を想像させる。と云ふのは句の背景に劇的シーンを持つてゐるからである。そして主題と背景とをうまく有機的に結びつけてゐる。この有機的と云ふことが又非常に大切なことであつて、如何によい背景を捕へても、それが主題とぴッたり合わないやうでは全々失敗と云つてよからう。描かうとする人物なり事件なりは決して周圍や背景から切り離されて存在するものではない。必ず因果的、乃至有機的關係があるものだ。

（二）

一を語つて後は讀者の鑑賞に俟つこと、成る可く簡潔な暗示に富む言葉を使ふこと、等々、短い文藝ことに川柳に於いて、最緊要の條件である。しかしこれは理論であつて實際上は仲々むづかしい。自分の云ひたいことがどうしても十七字に表現しきれないことがしばしばある。

名と齡とだけを聞かれて五十錢　　小春

これは選者の迷亭さんに限らず誰が讀んでも作意がわからな

い。名と齒とを聞かれたのは女給であつて、五十錢はチップだそうだが、こんな句が平氣で作れる筈はない。作者は少からず苦しまれたことゝ思ふ。卽ち能ふべくばカフエーとか女給とか云ふ言葉を表したかつたであらうと推察するのである。

四圓八十五錢の剩錢と朝日　失名

これは算盤であつて詩ではない。少くとも詩になるためにはもう少し言葉が欲しい。綾が欲しい。この句は『五圓札』と云ふ題の軸吟だつたことを確記して置く。

こんな例を擧げると、いくらでもあるが、そこに角あくごい技巧をこらさないで、すら〳〵詠みこなすには餘程の手練がなければ出來ないことだ。

デパートで亭主赤帽程に持ち　大鷲

これは前二句とは反對にかなり餘裕を見せてゐる。言ひたいことを充分十七字に盡してゐる。一を語つて後は讀者の鑑賞に俟つとはこう云ふ句のことである。文字の上では亭主だけを働かせながら、内にあれも欲しい、これも欲しいと甘ねてゐる若い妻君を立派に表現してゐる。拙吟を出すのは恐縮だが……。

味をみてる女房亭主へ返事せず

これなどは女房と亭主とが對稱的であるがため、修辭上、甚だ面白くない結果をまねいている。此點大いに大鷲さんに學ばねばならない。

（三）

背景のある句が主題の輪廓を鮮明にし、句全體を雄大にする上に於いて、有効なることは既に第一節に書いたが、こゝではその反對に主題を巧に色つけることに依つて、其の周圍の空氣をも表現し得た例を擧げてみやう。

白足袋の綺麗に動くお茶の會　たけし

『白足袋の奇麗に動く』と云ふだけの事實を述べてゐながらお茶の會の情景を彷彿せしめてゐる。お茶の會の實寫映畫でも見てゐるやうだ『白足袋の奇麗に動く』この巧まざる表現に、音樂的リズムが躍動してゐる。珠玉の樣な名句である。

幕末の臭ひのしてる倉の中　素堂

『幕末の臭ひ』と云ふ作者の井ツトが此の句に歷史的背景を釀してゐる『幕末の臭ひ』とは何と學ぶべき句語ではないか。

（四）

川柳が十七字詩であると云ふことは動かし得ない原則ではあるが、一般には字餘りや字不足の句が認容されてゐる。ことに十四字詩の如きは古句にも讀まれてあつて完全な一つの詩型をなしてゐる。つまり句の持つ詩的リズムを基本として考へたならば、字數などは大した問題ではならぬわけである。さきに例示した拙吟は六七五調であつて字餘りの一例だ。しかし一讀して字が餘つてゐると云ふやうな感じは少しも覺えない。これは一字多くてもそれがためにリズムに故障を來たしてゐないからである。但しこんなこと云ふのは手前味噌ではない。私が『味をみる』としたのを選者さんが『味をみてる』と直して取つて下さつたのだから……尙ほ字餘りの極端な例が差し當つて見付

からないので仕方なしで他所の畑へ這入るが、

榎時雨して淺間の煙餘所に立つ　蕪村

これなどは二十字もあるが、リズムは普通のありふれた形をとつてゐる。

實際馬の骨なる情婦なり　刀三

これは四七五調の句であつて、勿論立派なリズムを持つてゐる。これをかりに『實際に馬の骨なる情婦なり』とすら〳〵言つてのけたならば實際にと云ふ上五が單なる副詞になつてしまつて句意が著しく弱められて、全體の力が抜けたやうなものになつてしまふ、こゝに云ふ『實際』は一つの感歎詞であつて四字ではあるが『エッキスクラメイション、マーク』！と合して五字のやうな働きをしてゐるのだと思ふ、つまり一字少いことが此場合は句意を強調してゐるのだ。

たゞ私はこゝで、はつきり言つておきたいのは字餘りや字不足の句は相等句作に熟達した人がやつて始めてよい句になるのであつて、私等未熟の者にとつては絶對に禁物だと云ふことである。現在私などは少々内容が悪くなつても十七字に詠むべく強めてゐる。否五七五に合すやう苦心してゐる。

聖書一卷いたづらに煤けたり　雅幽

こんな名句でも私だつたら『いたづらに聖書一卷煤けたり』とするかも知れない。そうすることは表現を弱めるが、やがては危險な道を辿らない爲の初心者としての用意でもある。

（五）

川柳には短歌や俳句に於けるが如き詠歎がない。又誇張もなければ空想もない。從つてそれだけ人生を正確に見ることが出來る。この意味に於て川柳は一種の寫實派文藝だとも云ひ得る我々が今先輩に『川柳の作法』を聞くならば彼はきつと『先づよく觀察せよ、そしてとにかく作つてみよ』と言ふであらう。この答へはあらゆる寫實派の文藝にそのまゝ當てはまる。こゝに觀察とは云ふまでもなく事物の個性を見ることである。

孽屋の寢卷で醜くからず出る　空靈

瀬戸物屋賣れた火鉢の後を掃き　晶二

牛乳屋シャツの流行を見せて來る　山門

このやうな商賣人の個性を描いた何でもない句でも、平素から細かく觀察しておかないと句會で即吟出來るものではない。

鮮人の負ふた子供は尻にゐる　七六

鮮人の引越し皆で携げただけ　虚白

鮮人の醉ふた二人のやゝこしく　十紫

これらは觀察の行きとゞいた寫生句として上乘のものである醫者は胸に聽診器を當てただけで、よく内臓を見る。川柳家も單なる寫生から一歩深入りした、内を見抜く眼力が必要である

そこに寫實に成功した、善い句が生れるのだ

終りに少し線するやうだが、鮮人の句に

鮮人へ家主は拜む程に云ひ　南枝

と云ふのもあつて、こう云つた風に鮮人を詠んだ句は國際上どうだらうかと思ふ。勿論藝術至上主義的見地から見るのと、人道主義的立場から見るのとによつて、見解が違つても來るが私はこゝでは私見を控へて先輩識者の御批判に待つことにする。

（四、五、二十二）

川柳類題索引 (6)

川柳雜誌自第一號至第五十九號

安井ひろし 共
越村如香
安井欣女 編

題の配列はすべてABC順、題の下の日本數字は川柳雜誌の號數、算用數字は其號の何頁を表はす。

(五) 飲食物

A
朝飯 五五56
あま酒 五六47
あめ湯 五六47
B
麥酒 七21 一八23 五五55 五六48
辨當 四二50 四七47 五三54
ビール瓶 四四50
バナナ、 五三55 五五55
C
茶 四二50
驛辨 三八35
E
河膜 五〇58
F
牛肉 三六49
G
牛乳 四八70
稻荷鮨 三九46
I
小鯛 一五9
K
粕汁 二八26 二四14
鰹節 一七11
米紅茶 三五33 五四52
鑵詰 四六48 五六44
鏡餅 五〇53
菓子 五一51
栗 五八45
M
餅 三21 三八36 四九54 五〇60
蜜柑 二六24 四九58 五一53
飯 五三51
生ビール 四二53
N
鍋燒 四九55
夏蜜柑 四四59
南瓜 五七50
O
折詰 四八70
R
ライスカレー 四四53
S
すき燒 二17 一一9
白湯 二21
醬油 八14
西瓜 九14
刺身 二七13
五六45
四〇33
ソーダ水 三一21
支那料理 三七37
酒 四〇33 五〇55 五一49
鮓 四一47 五五54
吸物 四九59 五二53
砂糖 五六48 五九46
赤飯 五九51
T
煙草 一二23 四九57 五二50 五四51
五七50
心太 三三17
卵燒 四二53
鰯 四六49
唐辛子 五二46
U
梅干 七12
外良 四〇31
うどん 四七50
湯豆腐 三六62
Y
燒芋 五一47 五五53
Z
雜煮 四九56 四九57

(六) 建物、家具、器物 事務用品

A
雨傘 二八15
雨戸 四一32
合鍵 五三54
青疊 五四55
空瓶 五七35
B
雪洞 四18
四〇33
ビルヂング 一五10
四八69
バルコニー 四六49
鍵力 四〇30
バスケット 五一55
ペンチ 五九52

一路集

【募集句】

白痴

前田雀郎選

唄はせば白痴暫く忘れられ　光路
白痴の子連れと母親よくしやべり　耕民
わかるかと言へば白痴は欠伸をし　市公
學校の門へうれしく白痴來る　悟空
白痴の子南京玉で餘念なし　大南
白痴にも春は春めくいじらしさ　與ち雄
長閑な日白痴仕事ゑ笑ひに來　嘉月
笑談を言つた白痴に弱らされ　山茶花
徒らに白痴の顔へ花が散り　湖山
扨死んでみると白痴も不便にて　菊治
白痴の娘默つてゐれば美しく　萬樂
太陽に白痴欠伸をして眠り　城月
口笛が吹けて白痴の嬉しさう　鐵洲
名譽と富と白痴の子が出來る　迷亭
年頃の白痴へ母の氣が疲れ　折草
貧乏な内に白痴の子がそだち　公二
小供等の逃げてく後へ白痴の子　一日路
うそをつく事を白痴も知つてゐる　丸葉
白痴でも巡査は強い者と知り　清路
何も他に不足はないが白痴の娘　冷々子
身代は太り白痴の子が一人　青果
母ちやんが泣けば白痴も泣いてゐる　木偶人
事もなく白痴は豚の樣に肥ゐ　同
白痴今日カスリで本を二冊持ち　駒人
夕燒へ白痴幼き日もあらん　同
髮結へば白痴らしうも見ゑぬなり　六郎
親の目に噂さほどには見へぬなり　同
嫁き遲れ白痴の兄が恨めしく　陽喜亭
白痴の目にも銀貨の色を好き　同
秀逸
青空へ眼を疲らせる白痴の子　町二
劍劇の中に白痴の脊が高し　狂雨

C
地下室 一七14
提灯 四三54
ちり取り 五五51
銚子 一17
蓄音機 三三16
茶碗 五二56
五五53

D
傳票 一四12
電柱 三五32
道具 四五36
暖爐 五八31
電燈 二九32
三六62
土瓶 五三50

E
煙突 四七47
五二53

F
襖 四20
風鈴 一〇10
一八23
筆筒 四〇32
封筒 四二52
風呂敷 四五54
四八68
五六44
四九54
五二51
五八46

G
瓦斯 一一12
額面 四八61
御神燈 五九49
下駄 四18
三九44
ごみ箱 三八35
下駄箱 五三51
硝子 二五10
學校 五二56
四五57
五三52
五五58
五八42

H
報知機 六11
柱 九14
ハンモック 七12
風呂 三二22

泣きそうになつた白痴へ黙り喜由
吃驚させた白痴の方も吃驚し月
書寝する白痴に近所静かなり月
白痴もう兩手の指が足らぬなり
本もの〻白痴と知れて事が濟み
白痴ただ氣短だけが恐がられ高峯

丸刈

心外なことに丸刈初心がられ町二
丸刈の今朝角帶の締め心地駒人
丸刈は羽織の泥に氣が付かず武子
丸刈に母はまだ〳〵子供の氣大樓
丸刈の考へてゐる金儲け素人
丸刈にするのに床屋抱へ込み時雨郎
丸刈もやがて天下に呼びかけむ荷月
丸刈は意志の強さを顔に見せ文芳
丸刈になつて父の前母の前市公
課長になつて丸刈でも居れず無鬼
丸刈は恩給だけで喰て行け冷々子
丸刈へ職長望み持つてゐる
聞合せ丸刈の事も賞めておき勇宗
でありますと丸刈堅くなり鬼逸樓
丸刈の堅いところに引つかゝり卯三
丸刈が三つならべて高鼾不然
丸刈にしてボン〳〵の顔になり好次

白痴にも阿呆らしを知る遠い火事文芳
御大家の奥に白痴の白い顔不然
(人)淫感を白痴の千丈ヶ無事に居る青水
(地)白痴の兒戸口調査の數に入り己代松
(天)白痴とは思へど母の意見なりつばさ

安井ひろし選

丸刈へ親父の方が先きに惚れ菊路
紋付で來る丸刈をおかしがり暑岐
丸刈になつて氣輕な二十一大鷲
丸刈にして聖人のやうに見ゐ逢人川
會計の丸刈でゐる實直さ山茶花
丸刈の姉と歩いてテレくさし喜由
丸刈へつれない冬の風が吹き秋刀魚
丸刈をせぬ國情で頭痛膏敏郎
丸刈になつて日本人らしくなり清路
妻子への感激もなくて丸刈たけし
親分にして五分刈も押しが利き光路
丸刈に秀才らしい新博士普天
開會の辭に丸刈が目立つなり浮瓢坊
丸刈の凛々しさクラスの優等生たし路
藪入りをする丸刈のおちつけず陽喜亭
穩健な思想を抱いて丸く刈り善治
丸刈に線を太く生き六郎

箒 一11
日傘 六13
梯子 一三20
庖丁 一九13
火鉢 三八32
本棚 四一10
本箱 五三54
日覆 四四53
針 五三57
盃洗 五六44 46

旗 一11
箸 一一13
炮烙 一七16
細引き 二八24
四七50
五二49
五九52
抽斗 四一45
張板 五二55
針箱 五九52

I

家 五9
椅子 一三23
衣桁 二三23
板圍 四五54
印 五一54

四三49
三一41
三七36
インキ 三一40
糸巻き 五〇59
五一51
五四51

J

錠前 四八64
事務所 四八65

五五38

K

傘 一20
金庫 五11
國旗 六13
壁 九14
瓦 一七15
藏 二一15
小屋 二三20
炬燵 二五22

三九45
一二31
五八46
合羽 九13
結界 一一11
五二34
三五33
三七37

丸刈は錢を握つて待つてゐる　觀月
丸刈へ眞夏の午後の陽を受ける　雪峰

指輪

○　濁水選

淺果な指輪一つでまかす氣か　黑天子
可愛想な舞妓の指にない指輪　城月
ステージの世話に指輪かゞ光り　與詩夫
萬引の指へ寶石光つてゐる　六郎
姉さんに嫌ひな指輪一つあり　清路
初戀に破れて指輪まひもぐり　健坊
バザーへも指輪覗ふて光らせる　敏郎
一萬圓也の指輪が足を止め　柳月
初戀の思出さなる指輪なり　綠雨
節約を說く指にダイヤ光つてゐる　菊路
同窓會指輪をはめて痩て來る　悟空
お下りの指輪に下女はよく動き　一柳
入浴に邪魔な指輪のおきゞころ　吐句坊
里歸り姉に指輪の一つ殖ゑ　里十九
財產の首位に指輪を置く妾　東狂子
結納に付ける指輪の字にまよひ　花蝶
出戻りの姉の指輪がよく光り　鐵洲
甲丸の指輪に女給からかはれ　太路
誰からこ指輪を女中からかはれ　詩華流
銀指輪そつこはめてる下女の戀　佳水
借りたこは言はゞ指輪をはめてゐる　玄々子
家族の眼だけに指輪の無い娘　皎月
藝人の指輪きれいによく光り　藏六

丸刈にして丸刈に親しまれ　皎月

中澤濁水
水谷鮎美　共選

その指輪握つた儘彼女逝き　鬼逸樓
除隊して見れば指輪が變つてる　無鬼
なけなしで買ひし指輪もむだになり　瓢柳
心ブラは指輪をねだる心算なり　萬樂
エンゲージリングも知らず媚なり　喜由
新婚の當座指輪の無理も聞き　秋刀魚
好きの名を花に崩して指にはめ　柳
女學校出るまで指輪封ぜられ　大南
かたみやこはめる指輪の母の銘　柳村
金指輪まぶしく理智が暗うなり　秀聲
內面を語る指輪の凄し　天絲
アカギレへ指輪冷く春を待ち　さだを
極道の初め指輪を買つた頃　勇宗
花嫁の手へ靑春を斷つ指輪　卯三
會葬にダイヤなんごは抜いて行き　市公
月末がすんで戻つて來た指輪　柳影
指に光るダイヤも泥に活きる身の　桂枝
殘りなく指輪をはめて娘は逝き　沐天
骨上げに指輪出て來て捨て置げる　皎月
差しもせず捨てられぬ指輪にて　雨眠
入質のまゝに指輪の色が失せ　明果
夜店から夜だけはめる指になり　町二
證據品の中に指輪も光つてゐる　觀月
添乳してお針の指輪置き忘れ　公二

剃刀 二六28　四〇32　四三53
肩籠 三五11
鏡紙 四〇32　三九32　四八70　五一53　五五57
機械場 四一46　釘 四一45　五三51
金槌 四三49　五〇51　四二53
蚊帳 四四55　五五58
行李 四五51　唐紙 四八66
格子 四九57　腰掛 五〇58
黑板 五〇59　懷爐 五一50
カーテン 五五55 48　金屏風 五九48

M

みだれ籠 五11　俎 八16
水枕 九18　三四13
枕 三五32　三八36　五七53
マッチ 三九47　五五53　五七53
水引 四〇33　五五56　物尺 四二50
萬年筆 四五58　窓 四八45
磨砂 五〇55　五九44
幕 五五50　五六48
物干 五八50
ミシン

N

ナフキン 二22
糊 三九43　四四51
暖簾 四四59　糠 五一50

O

扇 四50　四三55　オマル 四二53
玩具 四三51　折鞄 四六46

不似合な指輪をはめて足がつき　浮瓢坊
其の指輪女房は出所きつう問ひ　白柳
貝取りに行つて指輪を拾つて來　好次
食ふだけの暮しへ指輪ねだられる　高峯
親と會ふ女給指輪を見詰められ　冷々子
次々の指輪をはめるいゝ暮し　夕鐘
指輪もはめずつゝくさと二十歳なり　同
出稼に母厘錢の指輪くれ　不然
半ズボン金の指輪が目立つなり　同
獨り湯の指輪で思ふことがあり　可村
お座敷の主に指輪をさし替へる　文芳
指輪だけ損して愛が甦へり　ゆつらん
指輪店女を知らぬ顔で立ち　同
折角の指輪を買つて嫁きはぐれ　湖山
エンゲージちと不似合な指になり　同
なつかしい南金玉の指輪の日　空山
女房の流せぬものに指輪あり　光路
亡い後を託す指輪に胸迫り　同
執達吏はめてる指輪見逃さず　東狂子
あの時の指輪で仲居嫁に行き　駒人
指輪屋へ來て園はるゝ思案極め　松風
賴母子がこれで指輪が一つ殖ゑ　陽喜亭
仕替への妓淋しい指になつて行き　同
指輪まで賣つて間借りの暮し向き　專路
書置の上に光つてゐる指輪　好次

五　客

鏡臺に切れた指輪は抜いたまゝ　文芳
萬一の用意指輪に金をかけ　普天
惠まれた思ひ出多き指輪なり　虛白
思ひ出の指輪を嫁ぐ娘に讓り　青果
印肉を拭いて親方指へさし　無鬼
(人)指輪から熱海の濱を賣りに出し　與ち雄
(地)高利貸太い指輪も凄く見ゑ　運坊
(天)白銀の指輪も母と何十年　キヨシ
(軸)エンゲージリングも袈裟の鉦に鳴る　濁水

○類句は指輪と、吊皮、上に重れた膝の手、欲しい、年頃、親方らしい、死骸、待ち遠い、結婚、痩せた指、節高い指、己むを得ぬ質草、未亡人、セルロイド、ウインド、嘲つてゐるウインド、などでした。

○　鮎　美　選

折角の土産の指輪氣にいらず　鯉友
お見舞の指輪が氣になる女客　柳月坊
買ふ前にも一度指輪はめて見る　光
添乳してお針の指輪置き忘れ　公二
藪入りは母へ指輪もぬいて見せ　桂枝
指輪たゞ虛榮の心へ生きてゆく　柳村
婚約の指輪嬉しい日が續き　浮瓢坊
如才ない女將の指輪よく光り　陽氣亭
對にした指輪で前の戀が知れ　秀聲
女給の手指輪をちよと借りて見る　悟空
正札へ指輪も一度見なほされ　さだを
まゝごとの指輪は亦セルロイド　青果
銀指輪そつとはめてる下女の戀　佳水
握手するように指輪を見てもらひ　嘉月
半ズボン金の指輪が目立なり　不然
信心に指輪も簞笥へ忘れられ　市公
小言聞く娘は指輪の手を見つめ　山茶花

P
ピンセット　五六48
R
蠟燭　四16　廊下　四二44
S
敷居　五9　五12　三〇33　四四53
盃　澁團扇　一八14
俵　十二36　杉箸　二四15
炭斗　二三9　二七31　障子　四〇32
硯　四三53
涼臺　三四34　二九32
皿　ストーブ　三九45
墨　四五50　四七49　酒倉　五一48
扇風機　四五59
算盤　四六53　五八47
摺鉢　五八42　支那鞄　五八50
T
高張　二10　六10
鳥籠　四〇23　三四37
天井　四〇32　五七47　五八30
一〇14　一一14　三九32
疊竿　一三22　盥　一七24
竹　二六27　四〇32　四四56
机　三〇6
電笥　三九44
簞笥　四〇32
籠　四三53　五七51
燈　五一55
棚　四四57　衝立　五九49
簞笥　四五55　裁板　五四51　五三50
椅子　五一53 54
時計　五三33
手摺　五九52
鐵瓶

指輪なご買ふてあの娘を欺かん　湖山
眞鍮の指輪で母は縫ひつづけ　東狂子
愛人の指輪小指だけはいり　白柳
舞妓等に指輪ぬいたら遣ること云ひ　松風
光つてる指輪も似合ふ若旦那　皎月
書置の上に光つてゐる指輪　好次
こつそりこ姉に指輪を見せにくる　天絲
喰入つた指輪に啄は手をあらし　柳
目をつむる女へ指輪はめてやり　綠雨
國へ發つ母は指輪もさしてゆき　運坊
なつかしい南京玉の指輪の日　空山
令夫人虚栄のたかさ指に見せ　藏六
借りた云はず指輪をはめてゐる　玄々子
戀人の指輪を持たぬのも淋し　今雨
マレーリングさへ子供へ共稼ぎ　敏郎
こんなのが欲しい指輪へ二人立ち　萬樂
成功をした手に純金を二本さし　秋刀魚
奥さんに貰ふた指輪細すぎる　夕鐘
嗜みこは別な形見の指輪也　與詩夫
指輪なき手のつゝましう膝の上　農夫也
病上り指輪のゆるい淋しい日　冷々子
手ばなさぬ指輪へ夫の目がこゞる　里十九
里歸り姉に指輪の一つ殖へ　同
指輪にもはやり廢りの型を見せ　菊路
節約を説く指にダイヤ光つて居　同
社宅から今日は指輪をはめて出る　太路
甲丸の指輪に女給からかはれ　同
ちりを嫌ふて寶石を光らす手　六郎
球突きに倦いて指輪を拭いてゐる　同

二點句

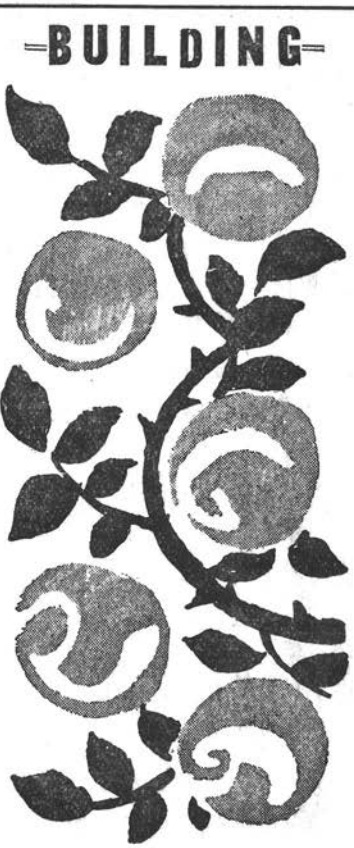
僞りの戀に指輪のかずく　小六
嬌奢な手に指輪のあこがれ目立ち　芙蓉
共稼ぎ指輪の色も賴もしい　卯三
藥代となるをはかなむ指輪かな　愛子
吊り革は指輪の光る方で持ち　清路
變てこな型になつてる純金指輪　觀月
指輪まで賣つて同情金ができ　沒食子
暮しよくなつたか指輪一つ殖へ　狂雨
片思ひ指輪々ヂット見つめて居　光路
華かな笑ひ指輪の手でおさへ　たけし
天秤の上で指輪の光ること　町二
疑ふて指輪へ息をかけてみる　虚白
節高の指に儲けの指輪はめ　駒人
チップまだ手にせぬ指輪よく光り　可村
(佳)畫の風呂指輪で思ふこと　桂風
(佳)溜息の眞下で指輪くもりゐる　たけし
(佳)囁けば指輪をいじりはかりにて　健坊
(佳)女教師の手に婚約指輪かな　町二
(佳)突返す指輪汚いもののよう　一舟
(佳)初戀のことても嬉しい指輪なり　香仙
(人)子守歌唄ふて指輪眺めてる　與詩夫
(地)陳列の中の指輪に好き嫌ひ　たけし
(天)指輪ごと握りしめき心なり　鮎美
(軸)幸福の一つに指輪かざれる

選後　路郎師の「何匁あるかと云へば拔いて見せ」ふとこころ手の中の句をふつと想ひながら選をしました。集句七百十三句全沒者四十六名を見ました(類多く可成まとまつてゐたものでも一方を採り惜捨した。盲選多謝。

植木鉢 三二40　U
團扇 四三55 四五59 五五58 五六44 47
乳母車 五八47　Y
屋根 八13 洋館 二〇19　Z
雜巾 二20 五九25
膳 四六51

(七)天象、時令、自然

A
嵐 三六23
朝 三八34 三九46 四〇32 四三57
雨 五七48 三九46 四五53 四六50 53 四九55 五一51 五二49 五九40
秋 四六51 秋の夜 五八49
明日 四八62 五八48　C
近頃 一六15 五九46　D
土砂降り 一九10　F
冬の雨 四八66 冬の街 三七36
冬籠り 三八35 四八71
冬の女 五〇56　G
月末 三六48 午後十時 三九43
月曜日 四六52 現在 五五55



前號でビルディングを新築したところが大變な人氣で申込殺到、支配人のサラリーが急に昇りさうである。萬よし老は南地ビルを借りて選擧に勝つた。これからは何んと云つてもビルディングの世の中である。（不朽洞）

もくぎよ

住田亂耽

私は木魚に就いて何等の考證的智識を持つて居ない。勿論法華信者でもない。その私が木魚に就いて　勝手な事を書かうといふのである。

○

我國には、何時の程からあつたものかこにかく木魚といふものがある。何故あれを木魚といふのか不思議でならない。形から見ても、どこから考へても木魚といふ言葉はどうもおかしい。

○

木魚――といふと割合に感じの好い語であるが、その恰好はあまり感心したものではない。私だけの感じだが、見て名ほど美感を與へぬ醜體の所有者である。極言すればちようど　軟體動物のしやれこうべのやうな感じだ。

○

支那にも木魚といふ語がある。北京官話で昔もあつた言葉かどうかはつきり知らない。之は鰹節を意味するものであつて――（いはでもの事だが、この場合モクギョとはよまず、もうゆいと發音する）――鰹節を木魚と言ふのは、如何にも支那らしい餘裕のあるユーモラスな語である。嬉しい。支那にもなか〳〵氣の利いた言葉があるものだと思ふ。鰹からの製品であるが故に、鰹節なりとよんで來た日本人はこの點からのみ言へばリアリスチックな餘りにもリアリスチックな人種だと言ひたい。

○

宇治の黄檗寺に何時か遊んだ時、鯉の形をした木鐸があつたが、あれなら木魚といつてふさはしい感じのものであつた敲くと中庭の青葉へやんわりこもつて游

子の情をそゝることいこも切なる音を發したものであることをおぼろげに覺つてゐる。木魚はあゝいふものから進化、いや退化して今日の如き形態を具へるに到つたのではなからうか。

いや――ひよつこするこむかし〳〵唐人のうつかりした洒落にその時代の所謂ざつおふ人のドグマが支那の木魚をそのまゝ日本の木魚にして了つたのかも知れない。

夫婦喧嘩その他

松をか町二

夫婦喧嘩は近代人に取つて最も道德的な憂晴しである。こ誰やらが云つた。僕は今京阪沿線の田圃の中の長屋の一つに蟄居して、頗る不生産的な生活をしてゐるが、未だ夫婦喧嘩の醍醐味は知らないが幸にも隣の中年者の夫婦が、毎日壁越しにきかせてくれる。妻君こいふのが少々難物で、亭主が若し一口でもお菜の不平でも云はうものなら、いきなり食べてる茶碗を引つたくつて、庭へ叩きつける位敢て珍らしくなく、時に暴發するこ御自分の亭主を柱に縛りつけて、髪を攫んでコツン〳〵こ――いくら道德的憂晴しでもこれでは亭主たるものやり切れまいこ僕ら凡人は思ふんだが、本人案外平氣である。意久地なさは別こして、こにかく

うるさゝに妻に壓倒されておきであるらしい。今更離緣するにも子供があるし――ほんこうはそんな勇氣はなし――女房に負まいこすれば尠からぬ毎日のエネルギーの浪費――よりも御近所さまへ御迷惑、こ悟つてゐるらしい。

それにしても彼は非凡な妻君のお蔭でその生活に色彩があり、少くこも刺戟があるわけだが、現在の僕なんかア……こ時々感傷的になるこである。

○

大抵の貧乏人は、その貧乏か與へる自由を自慢にしてゐる。大いに贊成であるだがごんなにもがいても、その貧乏から逃れられなくなるこ、誰でもそれを自慢にするより外に仕方のないものだ。

『金貨こ銅貨の相違こそあれ、大阪では誰でも兎に角金になりますよ』こ先日三好さんが云つた。自分なぞ、その大阪に住んでも、到底その銅貨にすらなり得ず――貧け惜しみでなく別にそれが不名譽だこは思はぬが――生涯逃れ得ぬ貧乏が與へる自由を自慢しなければならぬこであるらしい。

○

大阪では『日本橋』をニツポンバシこ發音する。東京では、ニホンバシこ云ふ兩者の言葉の性質から云へば反對であるべき筈こ思へるが、こにかく『わて――おます』の大阪が『日本橋』だけをニツポンバシこ本格的？發音で呼んでゐる。

おカネの句

蛭子生

ある日柳樽拾遺輪講の冊子が廻つてきて、初篇の

すくにひらくて釣臺を百ふやし

なぞをみる時に、古句はかなり便利に又適宜に金錢の額をあげて、事件の内容描寫に當てゝゐる。例に本誌六月號約千八百句をみると（探し落しがあるかもしれぬが）

大掃除思はぬ所から五十錢

内職の母の二圓が又屆き

五萬圓貯めて田舍もよい所

五萬圓なら片足くらよいと云ふ

の四句丈けが、五十錢二圓五萬圓の金額を明示して居るに過ぎぬ。柳多留初編七百五十六句中には八句ある。

百兩をほとけは人をしさらせる

喰がこしやくに出來て壹分めき

飯焚に百ほどたのむとうふの湯

二三分が買とうるさい程はなし

髮結も百に三ツはほれを折

きめ所をきめた二百はしやちこ

あんどんは百と百との結び玉

太夫職百で四文もくらからず

敢て統計的に言ふのではないが、此の傾向はある樣に、平素から思はれてならぬ尤も古句の方は『百で四文』とか『百と百との』なぞ、特別な定まつた事柄を意味するからでもあつて、五十錢が二十錢でも、五萬圓が三萬圓でも、よいのとは異なる點も見逃せぬけれど――圓タク圓本の句はものされてゐた――斯る方面に苦勞してみてよい餘地が、存するかの如く考へられる。

そして夫れは餘程巧に價値づけないと單なる概算丈けのものとなつて、その數字が句生命の中心たり得ない。隨分金！金！金！の世の中だから、金に腐爛した心的葛藤が共通に私共を支配する力は認められよう。元祿文學上の經濟史觀、古川柳の金錢觀は發表せられた。私共の作品も弗時代昂奮を、生活反映として、髮結も百に三ツはほれを折正直に滲透させて置く事は、唯物史觀からも一個の面目でもあらう。

愛

安西杏三

『私は愛の完成の爲めに努力するのではなく、愛の擁護の爲めに周圍のものと戰つて來た』とは一徹先生と私とが卓を圍んで語り合つた時の御言葉である。私はさまよへる小羊である。私の存在も解らない。神の愛も知らない。まして人間の愛に於ておやである。此世に於て最も純眞なりと云はれてゐる親子の間のそれですら其間に多分の醜いものを見出すものである。此先生の言葉は懷疑家の私に探つて一つの大きな驚異であつた。博士が平素研究されつゝある題目について一度論文を發表せらるゝや遠く歐米學界に其反響を見る程の斯界の大家ではあるが併し先生は決して科學的眞に對して絶對價値を置いては居られない『科學的の眞理とは何ですか。昨日の眞理は今日の夫ではない。今日の定說は明日屹度覆へさ

れるではありませんか』とも其折云はれた。

『もし此世に眞理があるならば夫は愛でなくて何でせう』と長い話を打切られた時の先生の粼かしき御顏は忘れる事の出來ない尊くも温和そのものであつた。

六月號先生の

愛の外に眞理あらんや軒深し

此句を讀んだ時此なる哉と思はず手を拍つた次第である。

由來川柳雜誌の句は路郎主幹が生活に則した句を作る樣に八釜間敷言はれるので血のにじむ樣な句に接する事が度々である。併し自分全體を打込んだ句を見出すのは中々六ケ敷いが此は先生の句であると同時に此句が先生であると言ひ得られる程先生全體を打込んであると思ふ。私は此樣な一句を殘すべく永久の努力を續けたいものだと思つて居る。

夏の茶碗蒸し

高橋かほる

中座で西の出まごの客がお茶子に茶碗むしを注文しましたのでおたけはんと云ふ其お茶子は

『旦那はん茶碗むしはあれは冬の極く寒い時分にお上がりになりますもんで只今はでけまへん』

夏の茶碗むし！お茶子もむづかしい商賣やなと思ひました。

ひとり言

松盛琴入

何處へ行く！これは人生の行路へ問ひかける言葉である。其處には爭鬪があり、正義に對する迫害がある。人生の行路！それはなか〳〵困難でもあり苦しみでもある。人生は旅であるともいふ。お互に翌朝をも知れぬ身を持ち、或時は華やかに唄ひ、或時はしほめる草花の如く又或時はたゞ一人荒野をさまようような淋しさ悲しさに鎖される。それ等を泌々と味ふてこそ詩も生れるのではありませんか、否それ自身が詩なのだ。然も之は動かす事の出來ぬ實在で人間苦であり人生其ものでもあらう。人は何處へ行かふと行く先を誓つたり目的を說明したり豫想した結果を述べたりする事は詩ではない。唯在りのまゝに素直にすべてを受け入れ其處に何等のこだはりもなく自然に溶け込んで自己の歩みを續け其哀れな姿をみつめてゐればよいのだ。人はそれであつてこそ眞に泣けもし大聲で叫ばれもする其聲は其まゝ詩であらう。眞實は僞りも扮飾もいらない、それは絕對な生活者だ。さうした絕對者のみに眞の詩は生れる。其圈外に在るものは嚴肅な意味で詩とは言はれぬ。それは作り物飾りものでしかない。斯ふ言へばとて私のものが全部さうした立派なものだと誇るのではなくさうあるべきだと言ふのです。人！

人は皆それ〴〵に同じ運命の下におかれてゐる　それが除り淋しいので偶然にしろ集まらふとするのは總ての動物が持つ本能なのではあるが、それも矢張り淋しい事ではなからうか。生活に追はれて發車時間をいら〳〵として待合してゐる人々とて同じだらう。先人は言ひました。『人間といふ生き物は思ひ出の中から悲哀と大きな苦惱からなる毒液以外には何物も攝る事は出來ない』と。現在もさうだ、未來もさうなのだ。然も別々に生れて離ればなれに死なねばならぬ一人旅の人間！さう考へるさへ嫌な事です。今私の前に大勢の人が集まつて來て居るが、それ等の人が何處へ行くかは私にはかゝはりが無いことだ。併したゞさうであつた事實の中に同じ運命を持つ私といふ自身を見出した時の……行きませう〳〵道頓堀の赤い灯青い灯、耐へられぬ惱みは强烈な酒もあをりたくなるではありませんか！。

嗚呼私は教へられた事を感謝しなければならない。彼のペテロの禮拜堂に消にかゝつてゐる文字、クオ・ヴアディス・ドミネといふラテン語それを讀み得る人は多いであらふがピーターをして迫害のローマに再び引返さしめた彼の境地は彼れ自身より外によく知つてゐるものはなかつた……と。

師の影へ手を合はしつゝついて行く

町柄は中の中

大窪文芳

今の假寓は、岩本素人氏の住宅より一丁も離れて居らぬ隣町である。此處へ移つて來て半年程經つのであるが、病身で引越して今に病臥中である。毎日病褥の枕頭に近く聞ゆる行進曲は午前五時頃に青物市場へ買出しに行くらしき、空荷車の轍の音に明け初めて、次に牛乳の配達車がゴム輪で何れも滑るが如く靜な音で通る。これから工場へ通勤の男工、女工

等が下駄音からころと忙がしく、笑ひ聲私語を織交ぜて通る　日はいよ〳〵昇つて來る。近所の石工屋は仕事に掛ると、荒刻み、仕上げ刻みの音、高、低くに八釜敷くなつて來る。登校すべき小學兒童が非々動きはじめ、近在より百姓が直接販賣すべく青物、野菜類の品名を高らかに讀み上げて幾等も通る。鈴を振つて來る煮豆屋の車が來る。味噌に御用ウ漬物に御用ウと小刻みに呼び乍ら來るもあり蜆はよろーしイ、花はよろーしイと朗かに老若の女も通れば、鯖や鰯の引きだちさも忙し氣に呼び續けて走る魚屋も五六あり、十一時半頃にパン屋が叩き太鼓の車を挽ひて來る。毎日此時刻までに物賣りが二十名以上は往來する。其間にそれ等を呼び留めて買ふ者賣る者との對話が交錯して來て、一時は逆上でもしそうに喧囂を極めて來る。その上に近所のお神さん達の門先會議もはじめられ、實に騒々しい町柄である。松山市中の中位の町である。軈て小學生徒達が晝飯に歸る時刻となり雜話、放歌、足音が一時に迫つて來て程なく、彼の松山城より正午を午砲で報して呉れるのである。之れが毎日吾町の正午までの行進曲である。自分は碌々出も出來ず、百九十日から毎日同じ騒音に接し病臥して居るが。こんな町柄に住むのも永らくの失職に續き、十ケ月からの病身のために辛棒せねばならぬのである。そうして此間に冬より春へ夏への氣候の變化、賣物聲の品物の變化人心の弛緩は日々の其聲の態度に明かに察せられる。それから此不遇を慰めて呉れるものは「川柳雜誌」始め外四五の柳誌である。げに持つべきは藝術的な口づさむべく且つ讀むべきものに限ると今更感を深くした。詩は有難いものである。川柳は物言はぬ人生であり、病褥に居て手に取る如く見ゐる社會である。又よい景色をはじめ絶巻等も病褥で眺められる。之れ永らく川柳界に身を置く全くの賜であると感謝を祖翁に奉る。

（昭和四・六・七稿）

轉落の柳行李

植田湖舟

何をする氣のあてもなく十三歳の身を持つて親に逝かれし小雀の其れの如く、あこがれの大阪へと旅立つたのである。丁度尼ケ崎汽船が大阪へ入港して川口を進んで居る時である。船客は各自荷物を持つてデッキへ登り初めた。話相手もなき僕は身に餘る柳行李を肩に擔いで登り出した。

重たさをこらゐて登る階段を自分の後から樣々の人が續いて來た。しつかりと擔いだ筈の行李が今一息でデッキへ出られると云ふ時、行李が階段の天井へ當つた。しまつた……と思ふたがおそかつた。續いて居る客の頭の上へとから〳〵轉げ落ちた。それを見るなり皆が呶鳴り出した。其時の僕はごれ程心配をした事であ

らう。謝罪するすべも知らず、唯茫然として泣き出しそうになつて來た。だが、幸にして自分が心配をした程でもなかつた。そこにゐた人達は皆いい人であつた。僕の小僧である事を知り同情こそすれ怒る者は一人もなくなつてしまつた。皆の顔には笑ひさへ出て來た。其の上行李をデッキまで持ち出してくれた。初めてほつとして嬉しさのあまり落ち付かぬ態度で何度かお禮の頭をさげた。今想ひ出すと此の時こそ本當のユーモアがあつたと思ふ。お互が眞劍なる態度そこにはついに笑はなければならぬ場面と變化した。眞の滑稽はこゝにあるのだと思ふ。

一生が行李轉ぶに似てしまい

短い話しであるがこれこそ僕の一生涯を連想させると想ふ。色々な事をやつて見たが皆不成功に終り今一息と思ふ時ついに病の爲にベットに永く横たはる身となつてしまつた。だが僕の希望は輝いて居る。其の柳行李の其れの如くいつか健康の手に、

佛の手に

神の手に

引上げられる日の近き事を待つて居る。

（大正四年三月卅一日午前六時頃の想出）

川柳家のこゝろ

西山玄々子

私の畏敬する川柳雜誌社同人庄禹よし氏が、普選最初の大阪市議戰に打つて出るらゝや、柳友諸氏の陰に陽に應援せられしは眼に見ゐぬ力強いものがあつたらうと思ふ。公然表面に立つて運動せらるゝ方々は兎に角として、裏面に隱れて應援せらるゝ事程それ程目立たず引合はぬことはない。それをやつて行かれた柳友諸氏の勞を多とするものであります。開票の結果第二位の高點を以て當選せられたのを私はわがことのやうに嬉しく思ふと共に柳友諸氏に心からお禮を申し上げます。

萬よしを男に仕上げたお朔日

川柳雜誌社經營に就ても之と同じに、隱れたる所謂『椽の下の力持』のあることを大に力强く思ふと共にそれ等の方々に併せて感謝の意を表しておきます。

○

失業半歲、加之種々の事情の爲めに失意のドン底に在るN、其の懊惱と苦悶を僅に川柳に依つて慰められてゐる。それを四圍の者は暢氣者と罵り、甲斐性なしと嘲けつてゐる。それでNは如何にと見れば不相變出來もせぬ川柳を駄句つてゐる。が其の反面にはその爲めに種々の迫害やら就職難の爲め生活苦に喘いでゐるのである。四圍の嘲罵是か、Nの行爲否か。

鯉のぼり

若井たけし

A『五月の空は靑い』

B『いゝね』

A『僕の書齋から鯉幟りが見にる』
B『ふーん』
A『寢室からも寢ながら見にる』
B『君とこの間取りはいゝね』
A『食堂からも』
B『近所に子供が多いと見にるね』
A『子供は向ひに一人きり』
B『？？？』

さけび

早筆恒子

あたしもビルディングの仲間入りがして見たい。何だ女のくせに!!とおつしやる人があるかも知れません。現に私の友人の一人に、川柳なんて女のしかも私の樣な娘つ子の乳くさいピーピーがやるもんぢやない。ありや世の中の甘いも酸も皆わかつた六十七十の爺さんのやるもんだとさん〳〵にひやかされた。

×

短歌を相當にやる妹をもつ私は聊かひやかされる。しかし短歌をやる妹が眞の女性で、川柳に少しでも百をつゝこんでゐる、イワユル川柳家の私は眞の女性ぢやないのでせうか。

×

勉強にあきてホット淡い疲れをおぼゐた時眞にあたしを慰めてくれるものは川柳をおいて他にない。

×

氣まゝなあたしは思ひ出すままに句を讀んだり作句したりする。思ひ出すまゝでもいゝ。牛の歩みでもいゝ。あたしは一生川柳とはなれることは出來ない。

川柳と二人連れにて歩む人生

首やがな

路郎生

日あたりのいゝ六疊へ小さな机を持ち出してナナが讀本の豫習をしてゐる。ナナは尋常の三年生である。

寺小屋出身で『この頃は何々のシーズンですよ』とか『何とかの殘骸がどうとかした』とかいふハイカラな言葉を使ふ大阪生れの六十九のおばあちやんが春に生れた、ナナの弟の一歩を抱いたまま、その豫習を見てやつてゐる。

大きな聲で讀み續けてゐたナナが急に行き詰つた。彼の女は首をかしげて『道といふ字の半分はなあに？』と聞いてゐる。すると『首やがな』と、おばあちやんのさびた聲が聞にて來た。なか〳〵頭のいゝおばあちやんではある。

○

ひろしが『丸刈』の選句をしながら『なんとな、丸刈に床屋二三度念を押しといふ句が五句もある』と感心してゐる。

こんな句は所謂穿ちの句としては成功してゐるのに違ひないが、こんな句を私は先着順の句と呼んでゐる。先着順になるやうな句にはカラーがない。平凡だとか陳腐だとかいふて棄てられるのはいつもこの先着順の句である。

各地柳壇

川柳雑誌社 奉迎川柳會

六月五日　於日本橋倶樂部

六月四日より三日間龍駕を迎え光と歡喜の大大阪となりました我社は謹んで聖駕奉迎句會を開催し川柳市民の喜びを心より捧呈しました。

路郎主幹の奉迎の言葉の後、過般の市議戰に當選した萬よし老起つて感謝の挨拶を述べ最後にひろし、山雨樓、一杉、紋太諸君の五分間スピーチに盛會裡に散會した。（ひろし記）

（參會者）

路郎、琴人、町二、角内、豆仙、葉詩芽、里十九、一杉、喜由、公二、ひかる、柳影、愚陀、善治、文蝶、源坊、山雨樓、悟空、鶴峯、かほる、一柳、涎湖、柳笑、楮雨、紫明、卯生、石竹、紋太、貴山、黒天子、夕鐘、小六、丸葉、卯三、沒食子、舟々、内匠守、十字路、萬よし、三笑、二柳子、ひろし

兼題　喜び　路郎選

喜びの日へ日記欄狹過ぎる　涎湖
喜びは幕から顔も出してみる　内匠守
喜びへ弟も來る兄も來る　文蝶
當選はたゞ頭下げ頭下げ　小六
男の子喜ぶ聲を空へ投げ　卯三
喜んで居るのが煙草ばかり吸ひ　悟空
「喜べ」と云うてゆる〳〵話し出し　善治
喜んで貰ふ心算が氣を害れ　一杉
喜びの窓を開けると風があり　凡平
アーチから喜びの砂きしるなり　柳影
喜びの二人になつてほつとする　ひろし
影ながらよろこぶつもり鯛を買ひ　かほる
輕蔑へこの喜びを語るまい　沒食子
よろこびへ二階の人も來てもらひ　觀月
車座になる喜びの夜が更け　鮎美
喜びの中に紋付着せ終り　柳笑
喜びは四十男のだきついて　三笑
物干へ出て喜びの港見る　卯生
胴上げにしたもされたも涙ぐみ　京郎
喜びの增へる小さきものを縫ひ　舟々
喜びの双手雨戸を押開ける　山雨樓
勝いくさ歡声が消えぬ顔を剃り　町二
糠よろこび妻を叱つて苦笑ひ　同
喜びの中に小さい啞が居る　角内
身分の差がお喜びまで躊躇させ　同
嬉しさは一歩あるけた子をかこみ　喜由
產聲が長屋の幅を噪やがせ　同
喜んで居るのにみやげ買うて來ず　丸葉
世話ずきのたゞよろこんでもらひたい　同
喜びがあまつて裾を踏んでこけ　琴人
扇風の喜びもせず餅を燒き　同
あのやうに喜びますとオツトセイ　石竹
（人）天皇日和だ知事の早起き　貴山
（地）喜びのこゝにも揃ふ足並よ　源坊
（天）暫くは夫婦おもちゃの氣で育て　聖駕奉迎
喜びやよしや貧しくとも赤子　路郎

席題　表彰　紋太選

表彰はそんな緣談きかぬなり　小六
表彰の寫眞まぶかつたと見える　かほる
表彰に親子笑ふも久しぶり　琴人
表彰をされて近所も改たまり　柳影
表彰の白粉氣なくなご見られ　石竹
雨さん〳〵と表彰の肩をうつ　愚陀
活動も知らず表彰されて居る　善治
表彰をされて國旗の家へ着き　悟空
表彰の幕をひらいて靜かなり　貴山
表彰狀奥の鴨居に光つてゐる　公二
表彰の胸は佛の事ばかり　柳笑

はげて居る頭表彰されてゐる　黒天子
表彰を明日に車輓く体軀　一杉
表彰をされればたゞの巡査なり　路郎
表彰の噂の通りよく動く　一柳
(人)表彰へ過然ですと云つてのけ　里十九
(地)表彰に案外多い女の名　紫明
(天)表彰式聲に力があり過ぎる　舟々
(軸)表彰があり一日を休んで居　紋太

席題　曳船　山雨樓　選

曳船の綱がかすんだ春の雨　愚陀
星の降るたゞ曳船の波白し　石竹
曳船の煙り子守の鼻へ來る　源坊
曳船は倉庫に着いて輕う逃げ　琴人
曳船の音と氣づいた泊り客　町二
安治川へ來て曳船は米をとぎ　平凡
曳船の何か呶鳴つた橋の下　一杉
曳船が大正橋を高く見る　二柳子
曳船へ橋の上からことづける　ひろし
曳船の波にボートは向を換え　喜由
曳船へ無駄に聞えるジャズバンド　同
その煙セイ一杯に曳いて居る　涎湖
曳船の長さ渡しは艫を放し　同
曳船のほかは出船の影ばかり　紋太
まだ釣れぬ眼に曳船の進み行く　同
(人)曳船で曳かれてゐるも淋びし　路郎
(地)河幅にもう曳船は歸るなり　舟々
(天)切れ話もう曳船の影も無し　かほる
(軸)失業の眼に曳船のすげなくて　山雨樓

席題　採用　かほる　選

採用の知らせほんまかと思ひ　一杉
採用はします和服はいけません　楮雨
採用さきまつて親父金が入り　ひろし
採用の嬉しさ石をけつてくる　柳影
採用はされたが服にちと困り　里十九
採用は足の先から見上げられ　卯三
二所から採用の通知が來　卯生
タイピスト女ばなれのしたな採り　源坊
採用は間違ひなしと呑んで居る　琴人
採用ときまつてキネマ見て戻り　善治
採用はともかく話の合ふ男　内匠守
採用はされず丸がり亦のばし　舟々
壁に足採用通知待つて居る　同
採用の氣があるらしくないらしく　石竹
煙草をさして考へておく　同
採用と決らぬ先に服が出來　文蝶
採用の日に國の母無事に着き　同
採用といふのに電車賃だけ殘り　涎湖
採用は大きな服を着て戻り　同
起きぬけに採用するが來てるなり　紋太
採用に二階その夜は早く寢て　同

席題　夏祭　互選

夏祭り香水の香についてゆく　卯生
夏祭り晴着をきせて汗をかき　夕鐘
夏祭り神主の汗よく目立ち　悟空
二階だけ仕事してゐる夏祭り　貴山
夏祭り牛日店へ座らされ　沒食子
夏祭りそれから紅をつけはじめ　豆佛
御近所と連れだつてゆく夏祭り　卯三
ゆかた着てたゞゆかた着て夏祭り　丸葉
庭の灯も馳走に入れて夏祭り　紫明
夏祭そこら歩いて蚊に食はれ　琴人

席題　見本　互選

はるゞゝと見本日本の海を越え　かほる
註文を待つて見本が減るばかり　山雨樓
見本ごつさり心得ました　石竹
香水の見本は大分減つてゐる　悟空
買はん氣へ見本山ほどならべられ　黒天子
洋食の見本に少しかびがあり　里十九
見本だけだらうと痛いことを云ひ　源坊
小商ひする氣見本を云つてやり　琴人
無駄になる見本と知つて宣傳部　紫明
慾を釣るやうに見本は出來て居る　喜由
懷へ這入る見本を持つて出る　柳笑
女房のちゑが見本を買つて來る　葉詩芽
風邪ひいてゐると見本も見て吳ぬず　紋太
見本見てからの思案が又變り　文蝶
値の事で見本は隅へほつとかれ　同
見本だけ持つて半年あゐて來　鶴峯
見本見てくさした方が買つて去に　同
番頭の口から見本生きてゐる　柳影
見本だけもつて氣輕うもうけに來　同
遠慮なく吳れる見本は貰つて行き　角内
タイヤの見本に爪をたてゝ見る　同
着て見れば見本の樣に引き立たず　公二
出來惡い品と見本を引きくらべ　同
見本帳見せて四五日掛ります　柳笑
見本帳早くまくつて氣に入らず　同
飴細工見本も貰れる事になり　卯生
見本みただけで食堂通りぬけ　同
あこがれた見本は僕の名で屆き　一杉
ひやかしたつもりが見本展げられ　同
見本帳無駄に展げて午となり　同

萬よし君
市議當選 **祝賀川柳會**
六月十五日 於 端 の 坊

（祝賀句會）（出席者）

萬よし、路郎、英、弘、蒼梧樓、公二、晴耕、金坊、山雨樓、善治、双葉子、一舟、里十九、有陀小六、柳影、陽喜亭、孤舟、苦香瓏、たけし、悟空、狂雨、古燈、起照、光路、英賀夫、春陽、つばさ、杏三、夢中、助六、沐天、文久、貴山、砂人、鶴峯、松山、伊佐美、突支坊、莢豆、愚陀、亂耽、ひろし、琴人、輝翠、内匠守、炭車、新水、三笑、ほる、二柳子

同人の萬よし君が普選最初の大阪市會議員の改選に南區から出馬し第二位で當選されたので柳友相寄り萬よし君の當選祝賀川柳會を開催しました披講に先き立ち、當夜萬よし君から立候補當時より當選までの感想と川柳家の多大なゝる後援によつて美事に當選した感謝の辭があり、又路郎先生からは萬よし君の當選を喜び萬よし君の熱と力と健康を祝福され今後川柳詩人も又社會の一員として一市民としてどし〳〵市會議員なり代議士なりに出馬されるやうと例の諧謔を交じへて感想を述べられた。散會後「萬よし」で祝盃を擧げ路郎先生の發聲で萬よし君萬歳を三唱し次で萬よし君の發聲で川柳雜誌社萬歳を三唱し十一時過ぎ散會致しました。カップを捧げた人々は次の二十九名である（二柳子記）

路郎先生、かほる、助六、莢豆、炭車、双葉子、公二、蒼梧樓、突支坊、里十九、苦香瓏、つばさ、夢中、孤舟、光路、起照、琴人、たけし、有陀、楮雨、内匠守、貴山、三笑、鶴峯、輝翠、新水、杏三、ひろし、二柳子

席題 子 持 路 郎 選

皆が皆子持の樣な金魚鉢 一舟
或る時は遠慮も出來ぬ子持ちなり 狂雨
躾糸電車の中で取る子持 夢中
社に出ては五人の親と見えぬなり 鶴峯
蚊にかまれたと子持ちが立つて行く 二柳子
子を抱げば古き戀など忘るらし 萬よし
子持の噂仕替取るなり 双葉子
子ぼんのう燒けた餅から順にやり 善治
死んだ子も數に入れての長話し 助六
寶塚子持ちはつらいものと知る 亂耽
背ナ子は兄の植木を持ちたがり 苦香瓏
この内のだれが孝行してくれる 蒼梧樓
同じもの又買うて來るいゝ子持 炭車
タクシーにしましよと小供抱へて 同
子を持つて近所へ弱い父となり 孤舟
子を持つて強い力となりました 同
氣にかゝる子へウエータの乳が張り 陽喜亭
又一人産まれ仲居は母を呼び 同
狂犬と子取の記事に晩の飯 杏三
昇給日專務子供を訊いてゐる 同
子をみんな片付けてからどつと老け 山雨樓
庭の草すら子持をいらだゝせ 同
玄關の下駄へ子持は歸つて來 同
（人）子持まだ花に行く程手がすゝ 輝翠
（地）子持となつてよく値切るなり たけし
（天）父の歸る頃を子持ちの外で待ち 二柳子
（軸）失禮をするに子持はなれてゐる 路郎

兼題 選 擧 萬よし選

棄權者の分も入れたい選擧場 町二
演壇に驅れて候補者聲が嗄れ 源坊
燃ゆる血へ普選々々の聲となり 晴耕
奮選の夜は大の字に一寢入り 菊川
投票に息子は無産黨に決め 善治
女將から見る選擧のあほらしさ 春陽
選擧場みんなほんまの年を言ひ 起照
襟を正しで入れる一票 蒼梧樓
投票に親子揃うて行くもよし 貴山
散髪に事務長痩せたなと思ひ ひろし
落選のビラへ日が暮れ夜が明げる 砂人
二階のも應援に出る社民黨 路郎
入れ甲斐があつた號外見せてゐる 公二
老父とは別に理想の人をいれ 突支坊
一票を法被忙はしく入れて行き 孤舟
當選の夫へ同じ主義の妻 たけし
當選を問へばかすれた聲になり 狂雨
選擧好き自分が立つた氣持で居 亂耽
亂暴にされて胴上げ悅に入り 山の中
棄權しながら當選の禮をうけ 助六
選擧もう過去の歷史の中に見せ 金坊
裏切りと知らず落選禮に來る 光治
選擧半ばに伯父伯母は邪魔がられ 輓峯
候補者がいつち氣樂によく眠り ひろし
選擧から歸れば妻の高鼾 杏三
女學生の噂に上る上かんや よし江
掛取は當選祝ふやうに來る 悟空
無駄口を初めて聞いた御當選 同
目がさめたやうに「社民」は押し出され 莢豆
一票の姿に見える二三日 同

お隣りへすまぬ一票入れに行き　陽喜亭
はるばると來た一票の尻からげ　同
選擧からむかついてゐる兄貴なり　夢中
交叉點選擧のビラを踏んで乘り　同
落選のビラをしがらき屋は包み　苔香瓏
晝休みこゝも選擧の噂なり　同
當選の朝朝顔のしほれてゐ　同
貴き一票妻の肩もかり　里十九
見た事もない候補者ばかりなり　同
當選をいばつて奚れる男の子　山雨樓
當選へ山高帽のいる日なり　同
(軸)當選を餘所に今頃ほとゝぎす　萬よし

席題　裸　山雨樓選

脊の低い事を裸は忘れてる　貴山
聲高い裸に酒の匂ふ事　輝峯
アトリエの裸になつた窓を閉め　悟空
裸一貫で大阪へ來た　小六
一層裸になれと盥の水を汲み　夢中
下宿の裸に無能内閣　愚陀
落ちぶれて裸になつて住みなれる　鵜峯
素ッ裸鏡があんなとこにあり　内匠守
裸に慣れた棟の低さよ　陽喜亭
もと通り裸で歸れ支那の姉　砂人
舊友を裸の儘で引き上げる　萬よし
裸で來い其の日から裸藥賣り　山の中
畫風呂で國から嫁をとるときめ　莢豆
裸になつて三十を知り　同
裸になつてみる山の青さよ　ひろし
裸のうれしさに部屋が狹すぎる　同
働きの外に裸の遊團扇　文久
卯の花は好みの庭の裸の子　同
裸二人アスパラカスに倦き　同
水あそびとう〳〵裸にされて居る　公二
全快のやいと裸になつて見せ　同
戸籍調査に裸恐れ入り　同
(人)裸になつて吾人の弱々し　柳影
(地)十八になつて裸を見せぬなり　双葉子
(天)働いて居れば裸もうれしくて　孤舟

席題　酒樽　互選

酒樽へ仲仕の力餘るなり　山雨樓
酒樽のたが青々と年が明け　光治
酒樽をすゑて餘裕を見せている　孤舟
酒樽へ竈の煙りはふて行く　晴耕
勝手元酒屋は音を聞きに來る　公二
酒樽のつめのあたりで子がほたえ　善治
酒樽を世帶と別にすゑてゐる　里十九
酒樽に父は嬉しい日が續き　二柳子
酒樽に音あり鯛を燒くにほひ　杏三
案外の早さにたゝく酒樽　晴耕
酒樽の上へどう上げ下ろされる　双葉子
酒樽が威壓してゐるお臺どこ　路郎
酒樽もむなし嫁逃げてゐる　たけし
酒樽を殘し死んでしまつたか　同

席題　萬よし　互選

洋服で見れば上かんやと見えず　苔香瓏
萬よしが市内版をば賑やかし　英賀夫
議事堂で萬よし一句拾ふて來　炭車
萬よしに聞けばこれからでゝと言ひ　助六
當選の寫眞萬よし若すぎる　貴山
上かんやからして無産黨の色　善治
述懐をする萬よしは弱く見へ　沐天
當選に萬よし酒をつぎこぼし　古燈
萬よしさん若く寫つてゐるはれえ　有陀
よろこびにビールの泡もはれか〻　ひろし
當選の喜びも受け酒をつぎ　里十九
萬よしの暖簾麥稈帽で分け　夢中
のれんから見る萬よしは湯げの中　狂雨
萬よしの其日を語るため子女史　突支坊
當選をしても萬よしへい〳〵〳〵　公二
市役所の電話のかゝる上かんや　文久
萬よしに庄健一が酒をつぎ　双葉子
當選の話萬よしつぎこぼし　同
女房の腕を萬よし認めてゐ　愚陀
髯をおこうかと萬よし朝の寢間　同
萬よしが當選すると思はざり　亂耽
君鋏を置けと萬よし云はれて居る　路郎
又元の萬よしになり酌いでゐる　同

川柳雜誌社　**堺支部六月例會(堺)**

六月十二日夜於大濱潮湯家旅湯樓上
參會者二十名　友淵貴山報

兼題　朝　かほる選

一條の煙ハツキリ朝をみる　さだを
朝刊を見る藤椅子は庭へ出し　善治
月給をとりに忙しう朝を出る　春汀
身の丈の合はぬ浴衣で齒を磨き　一杉
朝風呂でスツキリ分けた髮の艶　萬年青
日曜の朝玄關へ水を撒き　青砂郎
見晴らしの窓から朝が訪れる　文蝶
今日からは一人ぼつちの朝を起き　同
今少し寢て居てもよい旅の朝　兎歩
お早うも忘れて微笑する　同
(人)「お早う」女中は笑ひ〳〵逃げ　五輪

地）今朝早く内證の男見付けたり　松風
（天）薬磨を持って静かな井戸へ來る　清路
（軸）日にやけて朝の鏡に寫るなり　かほる
席題　移民　多聞　選

一層の事移民など考へる　又光
そこここ移民は垣を廻らされ　かほる
日に焼けて日本の空を憧れる　春汀
金持てば歸って來たい移民なり　黒天子
廣漠たる原を夢見て移民寢る　兎歩
年頃の嫁もあって移民なり　一杉
今日からは移民となった鍬を持ち　文蝶
見せ金に移民は少しムッとする　清路
移民もうなれて敎會などへゆき　同
出産を待って移民と決めてゐる　青砂郎
移民十年酒の量が増へ　同

移民など言はれぬ程に成功し　貴山
成功を忘れる程に船に醉ひ　同
（人）泣いてゐる母移民をまだ説く氣　青砂郎
（地）繪葉書で來たブラヂルの年賀狀　同
（天）親指の爪に移民はしわがより　かほる
（軸）モウ船は出たの醒めぬ移民の子　文蝶
席題　盆　選

盆持つたうしろすがたを見て通り　多聞
塗り盆にコップの戴つた型がつき　善治
盆一つ三味と合わして月となり　太路
いやですと茶盆の雫かけて逃げ　松風
投げ込んだ盆に銀貨が落ちつかず　春汀
銀盆を拭き〳〵女給罷り出る　萬年青
氣がねない人に菓子盆圍まれる　黒天子
前だれの端でお盆が拭いて居る　さだを
澤山な客へお盆が小さすぎ　不言
心易さに茶盆発げてゐる　青砂郎
茶盆の丸さ腹立たしい夜　同
（人）生國を問い詰められる給仕盆　又光
（地）盆丈けの膳ごしらへで病みつく　黒天子
（天）盆だけが机に殘るクラス會　五輪
（軸）お盆から一つ子供へとつてやり　文蝶
席題　附馬　春汀　選

附馬の苦勞くどく申し立て　太路
附馬へヨッポド醉った振を見せ　萬年青
薄暗い露路で附馬待たされる　青砂郎
附馬の強さ上まで上り込み　一杉
附馬のさて氣味悪い午前二時　又光
附馬と懷ろ寒ふ肩並べ　松風
附馬へいゝ口實が見當らず　善治
附馬へ煙草一本くれてやり　さだを
附馬は知人に逢って困り果て　兎歩
（客）附馬へ振返り〳〵して辻を折れ　文蝶
（客）醉ふてゐるのへ附馬のさかずき　多聞
（客）附馬になれば眞面目な女なり　貴山
（人）高下駄のまゝ附馬になる板場　文蝶
（地）不夜城を出て附馬に見下げられ　松風
（天）附馬に話掛ければあつけなし　青砂郎
（軸）やゝこしい所を附馬歩かされ　春汀
席題　洗濯　青砂郎　選

洗濯へたもとのはしを頼まれる　不言
洗濯屋今日も不在に訪れる　五輪
ハンカチを洗って吳れる程になり　一杉
洗濯の母へよごれて戻って來　さだを
洗濯は他所の子供を賞めてゐる　黒天子
落ちてない垢へ女中の口答へ　太路
洗濯屋見覺えのある服が來る　善治
洗濯の眞似もしたがる五つ六つ　清路
乳母車洗濯の場へ押して來る　兎歩
洗濯屋黒い帽子を見逃さず　萬年青
お洗濯チョット〳〵と子を抱かせ　同
洗濯へ氣嫌の亭主邪魔がられ　多聞
洗濯の了ったらしい音を立て　同
（人）洗濯に安い石鹸買ひに行く　松風
（地）洗濯へいつもの雲がういてゐる　多聞
（天）洗濯をしながら鰯値切ってる　又光
（軸）洗濯の女房奥を差した丈け　青砂郎
席題　雨やどり　互　選

雨やどり越えればならぬ溝があり　貴山
雨やどりうつかり人を見違へる　五輪
今頃は歸っているに雨やどり　萬年青
雨やどり泣く子へ乳をくはせ　さだを
琴の主覗いて見たい雨やどり　又光
とも角も驛へ走った雨やどり　清路
雨やどりそこらの繪馬を見てあるき　太路
雨やどりまゝよタクシー呼び止める　不言
雨やどり大きな犬がゐるところ　春汀
雨やどり湯氣のたつてる鶏の羹　多聞
雨やどり諦めたのが歩き出し　一杉
美味さうな匂がして來る雨やどり　かほる
雨やどりラヂオ半分聽いて立ち　青砂郎
三越でゆっくり雨の音を聞き　松風
席題　歌劇　互　選

近頃は母から誘ふオペラなり　五輪
小さい手が鳴って歌劇の幕が明き　又光
義太夫もまじって歌劇嬉ばれ　さだを
面白い歌劇が母に判りかね　文蝶
指定席足で調子を取ってゐる　青砂郎

汽車になる歌劇の足のよく揃ひ　太路
歌劇ならいつち前きて見る男　貴山
かんじんな所で歌劇が歌になり　春汀
よい歌劇次回は一人來ぬ積り　萬年青
歌劇觀る濡手拭を持つたまゝ　松風
歌劇で見る幽靈は面白く　清路

席題　早速　互選

早速は井戸から出した冷し麥　太路
早速に地方へ三味が渡されて　かほる
早速に尻を上げれば笑ひこけ　青砂郎
飲み連れは早速辻を曲るなり　兎歩

川柳雜誌社
松山支部

六月例會（松山）

六月一日於金龜館　西山玄々子報

兼題　石　女　時雨樓選

石女は何處か淋しい影があり　鬼笑
兩親へ石女孝行盡すなす　花の助
もう四十諦らめて居る石女　極光
石女にあやされた兒は泣き始め　夢郷
石女は甥の學費を出してやり　大樓
姙娠を夢見石女淋しがり　眺畝
石女の讓り手もない金を貯め　抽蘭坊
何も彼も諦らて居る石女　句涙人
不産女は結局姉の子を貰ひ　大鷺
石女は西洋かぶれな事を云ひ　巨城
石女の先を思へば淋しうて　玄々子
子のないを亭主の罪にしてしまひ　素人
溫泉で石女同志のヅマが合ひ　青帆
動物愛護を叫ぶ石女　大樓
産む事を知らぬ女將の酒肥り　素人
笑はれる程石女の信心し　五健

石女は狆へ勿体なくも着せ　五健
石女は捨子の記事に目が光り　磯月
（軸）石女は疫痢の話慳に聞き　時雨樓

兼題　武術雜吟　五健選

段ちがい其の割合に念が入り　花の助
賞讃へいや天運と謙讓し　雨眠
靜養に好きな竹刀を又握り　抽蘭坊
名人は竹刀を持つと腰が伸び　句涙人
腕が良し業物も良し眞ッ二つ　逢人川
鋭劍のすごい氣合が勝を占め　飴ン坊
フラ〳〵にすると指南は次を呼び　かき松
劍道着肘を張らぬと損な顏　柳花坊
柔道の肥つた方が投げられる　三雪
ヤアッ〳〵師範なか〳〵打込まず　時雨樓
長刀を使ふに惜しい高島田　素人
（秀逸）柔道を習つたと言ふ歩き樣　逢川
逃げ乍らたゝた小手が當つてゐ　夢郷
叩かれて稽古の二人意地になり　雀坪
するそうなのをさし招く稽古臺　かき松
小手すれの手で小使は炭をつぎ　大樓
薙刀か出來てオールドミスで居り　時雨樓
（人）昔なら五百石はの腕を持ち　大鷺
（地）輕みにもならぬ柔道二段なり　素人
（天）激怒した竹刀あつさり扱はれ　大樓
（軸）武德殿氣合に滿座水を打ち　五健
（軸）禮儀正しく息の根を止めんなり　同

席題　萬　引　素人選

背の兒の泣くに萬引氣が變り　夢郷
萬引を番頭見上げ見おろして　青帆
萬引をやり損つて高く買ひ　鬼笑
萬引はエレベーターでほつとする　巨城

萬引と氣附いた時にもう居らず　玄々子
萬引の女係を手古ずらせ　極光
聞き取れぬ聲で萬引申譯け　大樓
萬引と知つて店員つけさせる　時雨樓
萬引の本當に買つた品を持ち　五健
萬引の客へ店員有難う　巨城
萬引は唯泣くばかり〳〵　かき松
萬引があがりそはつく店の客　巨城
交番の美人萬引したにきめ　玄々子
萬引は禮儀作法のいゝ女　大樓
萬引の憐れは背なに無心の兒　五健
（軸）萬引の悔悟錦紗の袖が濡れ　素人

席題　言掛り　玄々子選

言掛り妻はおろ〳〵するばかり　極光
言掛り黑白つかず物別れ　時雨樓
言葉尻どうでも金にするつもり　五健
言掛り廓の宵の人だかり　巨城
言掛り埒を承知で賣つて居り　三雪
言掛り段々聲を高くする　逢人川
もうやめ氣の言掛り負けてゐず　大鷺
言ひ掛り相手が刑事とは知らず　素人
打水の飛沫へ無理な言掛り　大樓
（軸）言掛り今更退くに退けもせず　玄々子

席題　鉤裂き　互選

鉤裂きの小言虫干毎に聞き　榮三郎
隙れんぼ鉤裂きをしてタイムなり　春陽
鉤裂きの上に兵兒帶廣げげり　鬼笑
鉤裂きをしてふだん着におろさる　三雪
鉤裂きの跡へ小さい刺繍をし　巨城
鉤裂きのまへうしろにもならぬ　素人
鉤裂きを朝寢の床へ見せに來る　夢郷

鉤裂きを親父が見ると笑ふだけ　逢人川
鉤裂きのつぎはつきりと紺木綿　極光
鉤裂きを叱られおとなしうに寝る　時雨樓
酔がさめ鉤裂き妻に叱られる　大鷲
鉤裂きの譯を母親くどう聞き　かき松
鉤裂きをして柔道のまねをやめ　大樓
鉤裂きを押へて子供すわるなり　青帆
鉤裂きへ女房の凄い目が光り　玄々子
鰯裂きへ年甲斐もなく叱られる　五健

川柳雑誌社梅田支部
森石竹氏退社惜別　**きりんていはうすの句會**

五月六日夜　水谷鮎美報

「蛙ふくれるな埋めてかへすよ」の句で有名な瓢逸作家森石竹氏が今度家事の都合上阪神電鐵を退社されました此後奈邊に勇躍されるゝ？氏の多幸を祈る。從前通り當支部同人として御盡力下さる由本社より かほる氏二柳子氏御來會くださる觀月君の互選 披講にはぢまり石竹氏の「お別れの言葉」に終るそれから打ち解けて卓を圍むだ若人は、酒盃を擧げ高らかに唄つた。かほるさんの折紙附きのおかるゝと相役萬よし氏の平石衛門の 一人二役いつもながらに艶麗、里十九君の「淨瑠璃さわり集」冷笑君の「垣根の糸瓜」夕鐘君の音羽家の聲色健實な眠聲君は 感心係、それ〴〵十八番もの揃ひに 興の盡きるを知らず散會したのは十二時過ぎ石竹氏は 感激の面に漲つてゐられた（鮎美記）

尚今席上より賀名芽君は夕鐘と改號。

兼題　獨り者　互　選

獨り者母の氣持をよく知つて　卜居
出勤に間に合ひかねる獨り者　香仙
獨り者の方がよつぽど氣樂です　里十九
獨り者眠むたい朝がつづくなり　觀月
孃曳を見つけて歸る獨り者　鮎美
それ程の儲けもなくて獨り活き　楓林
變つてるフン變つてる獨り者　石竹
獨り者まよ〳〵の日が續き　夕鐘
獨り者今夜の酒がにがいなり　かほる
夕立ちに濡れて歸つた獨り者　同
電灯をさげて獨身寝てしまひ　二柳子
下から呼ばれて獨り者掃いてゐる　同

兼題　鯉のぼり　二柳子　選

鯉のぼり世帶と別にあげて居る　里十九
鯉のぼり乳母の里から屆けて來　鮎美
夕日赤々鯉のぼりやせてゆく　石竹
物干が大ぶいたんだ鯉のぼり　かほる
鯉のぼり隣の家根にひつかゝり　夕鐘
金時も一所に上げる鯉のぼり　同
（佳）鯉のぼりそれ男の子男の子　里十九
（佳）鯉のぼり見つめて家の暗い　夕鐘
（佳）鯉のぼり慾から見る子が弱し　鮎美
（佳）鯉のぼり乳母の指揮で上げられ　かほる
（佳）鯉のぼり二階で一度ひろげられ　同
（軸）雲ゆきが悪し鯉のぼりおろされ　二柳子

兼題　友達　かほる　選

久しぶり今日一日を若うゐる　楓林
友達の友達が來る日曜日　二柳子
バンドを締めて友が出てくる　石竹
友達と背中合せに寝てしまひ　鮎美
友達の妹は十八九　香仙

友達はもう三人の父であり　觀月
友達に意見をすれば酔ふてゐる　同
友達を困らせてゐるいゝ氣嬉　夕鐘
病院に泊つてくれる友の情　同
土砂降りへ友達肉をさげて來る　眠聲
本當の友達俺を馬鹿と云ひ　同

兼題　行く先　石竹　選

行く先も言はず次男の出たつきり　夕鐘
行く先の先まで母は氣をつかひ　同
行く先は皆別々な道に立ち　香仙
行く先はどうでもいわうんと飲め　觀月
行く先を考へながら日向ぼこ　鮎美
神樣だ神樣だ俺の行く先　眠聲
行く先で羽織のカンがはげて來る　かほる
行く先をちやんと妻はこゝろえる　二柳子
（人）墓へ來てフト行く先を考へる　楓林
（地）尻からげして行く先のおもしろ　鮎美
（天）行く先を知らすはがきに蚊がぶり　かほる

川柳雑誌社加古川支部於桐郎居　**耽柳會三十五回例會**

水田桐郎報

兼題　奢る　互　選

奢られてみれば案外不味いもの　泰山
奢られていらぬ世辭まで並べてる　洛陽
奢り手は一番後に腰をあげ　桐郎
奢られてゐると思へば淋しくて　五彩果
奢る氣で云ふたが先で拂はれる　よしを
よう持てた者が奢ると決めて行き　尾秋

兼題　橋　互　選

思ひ出の橋を淋しく渡つてみ　泰山
若夫婦橋の兩端歩いてゐ　三八

鐵橋を越せば町の灯母の影　五彩果

別れて歸る橋に風なし　桐郎

今回から金川三八君、谷口のぶを兩君が新に入會を致された、只今の會員名を左記す

原尾秋、前田よしを、金川三八、宮田泰山、谷口のぶを、水田桐郎、山本洛陽、水田五彩果

川柳雜誌社　螢ケ池支部句會（大阪）

桂田湖舟報

六月九日午後一時より　敎室に於て句會を開催致しました。本社より二柳子先生が御出席下さいました尙。舟々氏が出席下されましたが當日は常よりも早く閉會した爲間に合はなかつた事が殘念でした、深く兩氏の志に感謝致します。

兼題　皿　二柳子　選

お手際を腕一パイの皿にみせ　狂兒

チップだけ別にお皿へ入れて立ち　比良治

長く病み洋食皿の懷しく　みのる

皿の數增へて世帶らしくなり　瓢簞

婚禮の皿をふいてる高島田　湖舟

灰皿と全集ものゝ宵の口　普門

（人）破れた皿合せて見るも女の氣　同

（人）シャンデリヤの下にせは皿の音　岳三

（地）魚屋のお世辭皿までほめてゐる　普門

（天）そりかゝる女給四五皿運んで來　運坊

席題　平等　普門　選

平等に分け前を取る十五六　茶樂

繼子へもおんなじやうに義理の母　藏六

平等を信じて歩くアスファルト　波紋

席題　夏帽　藏六、皎月、湖舟共選

一　點　句

みな此處で麥藁になる登山口　松莖子

夏帽にまざ〳〵と見る生活苦　藏六

胸あけて阿彌陀にがぶる一文字　普門

夏帽に汗と油の菜葉根　運坊

夏帽で來るビルヂング風があり　二柳子

二　點　句

學帽へ白布をかけて夏がくる　たけを

均一の口かと夏帽からかはれ　わたる

髭の父へルメット帽がよく似合ひ　惠美須

夏帽へ虻威勢良く突き當たり　波紋

無雜作につかむパナマへ風があり　松莖子

三　點　句

夏帽の士官涼しく町を行く　松莖子

面白いほど轉げてく一文字　普門

兼題　不孝者　互選

不孝者と云ふには惜しい男振り　比良治

不孝者子を持つてから恐くなり　わたる

不孝者たゞ默々と香を爇き　運坊

臨終に不孝を詫びたとまた涙　渺々

不孝者眉間の疵が目立つなり　普門

不孝者故郷の驛に重く降り　白郎

貧しさへ家出の子供が口に出る　妙哉

藝術は成らず不孝知つてゐる　岳三

妹に意見をされる不孝者　茶樂

意見されながら女のこと思ひ　みのる

不孝者同士クラブで日が永い　藏六

不孝者宗右門町の灯につかれ　湖舟

夕鐘居小集（大阪）

五月廿五日　姫田夕鐘報

ゆく春の夜句作にふさわしき雨の音を聞きながら梅田支部同人が心ゆくまで語らひました。

兼題　海水浴　互選

波にのり戀人の顏見へぬなり　石竹

砂にうづまり海水浴の日は暮れる　ト居

ちと水を飲んだへ波が打つてくる　觀月

名を呼べば波のまに〳〵手をあゞる　夕鐘

女とくれば海水浴の波高し　鮎美

兼題　畑　石竹　選

粥すゝる麥畑のうらゝかさ　ト居

別莊の裏に小さい茄子畑　夕鐘

トンネルを出ると一面桃畑　里十九

出戻つて麥の青さへ肥をかけ　鮎美

（佳）畑々々手拭の動く　觀月

（人）買ふた畑で晝飯を食ひ　ト居

（地）滅びゆく畑にせめて一鍬を　同

（天）鍬を忘れて畑の青さ　鮎美

（軸）畑の氣持雲雀が下りる　石竹

兼題　相談　鮎美　選

相談もすんで一風呂ぬびてくる　ト居

相談の立ち聞きと知る茶をすゝり　石竹

相談の膝へ兒が乘りたがり　夕鐘

相談に一べん外へ出てもらひ　觀月

相談がすんだと見へてお手が鳴り　鮎美

兼題　道頓堀　互選

若且那道頓堀は眼鏡かけ　里十九

とにかくも道頓堀へ足を向け　觀月

久ぶり道頓堀の色を見る　ト居

道頓堀こゝにも乞食の兒がひさり　夕鐘

道ぶらの人へ巡査しやんと立ち　鮎美

川柳雜誌社
加古川支部

耽柳會 三十六回 句報（兵庫縣）

水田桐郎報

兼題 横顔

横顔を見られてる樣な羞しさ　洛陽
口説かれて横顔つんと煙草吸ひ　のぶを
彼女は拗ねるその横顔の美しさ　尾秋
横顔に化粧くづれの跡が見え　青路
肖像畫横顔妙に物足らず　泰山
中將湯飲む横顔へ初夏の風　五彩果
不孝者父の横顔盗見し　三八
すれ違いはてさ横顔思ひ出し　よしを
横顔へ男の熱い目を感じ　桐郎

兼題 金魚

金魚屋の聲樣側へ呼び入れる　泰山
晝寢からさめると金魚浮いてゐる　五彩果
後家がやもめか金魚の生き永らへ　桐郎
金魚屋に涼しい風がついてゆき　同
金魚屋が掬へば他愛なうはいり　同
夕立のさて走られぬ金魚賣り　よしを
水ばかり呑んで金魚の美しく　尾秋
賣られゆく金魚は他愛なく泳ぎ　三八
ポツカリと金魚の欠伸夏日照り　のぶを
堪能したやうに金魚は泡を吐き　青路
（佳）圓本の賣るには惜しい金文字　玄洋
（佳）圓本を屑屋目方で値をきめる　吉朗
（佳）圓本の棚下しする古本屋　亮山
（人）圓本を伏せた仲居へ急な用　宙外
（地）圓本も見あいた雨の日曜日　玄洋
（天）印税で氣樂に暮す未亡人　香翠
（軸）花見留守圓本というつれがあり　盧白

突支坊選

兼題 愚痴

思えらく女房は少し愚痴かしら　斧葉
一週忌又新しい愚痴が出る　香翠
女房の愚痴を肴にのんでいる　月男
三越を出て新妻の愚痴を知り　宙外
その愚痴を今日は女房がたしなめる　双光
云いたい愚痴へ盃が出る　壽郎
女房のあげる箪笥へ輕いぐち　萬樂
逆らわぬ樣に聞いてる妻の愚痴　吉朗
其の愚痴も一通り聞く執達吏　柳堂
春の夜をまた女房の愚痴となり　同
（軸）智惠つけた其の胴輩へ母の愚痴　突支坊

名賀壽會（尼崎市）

四月六日夜　於大物村區集會所

今村吉朗報

二册目にもう圓本が嫌になり　萬樂
圓本の埃だらけのまゝ積まれ　同
雨漏りへ氣になる一人立つて行き　水樹
留守番の氣を替へさせる雨が漏り　同
此の雨を朝鮮人の何所へ行く　素人
雨漏りへ亭主の方が眼を覺まし　同
五圓札握つて雨の中を行く　同
（軸）踏切のこんな夜だった雨になり　五健

送り膳　水樹選

送り膳下戸の亭主が待つてゐる　青帆
晩酌を控へて置いた送り膳　三雪
送り膳女房の留守を屆けられ　雨眠
容態も聞いて待つてる送り膳　五健
送り膳家内が留守で御座います　素人
送り膳隣の丁稚吹まり　同
（佳）送り膳ゆるい花緒を危ぶまれ　五健
（佳）送り膳重れがされの禮を言ひ　武子
（軸）門をこかして屆く送り膳　水樹

川柳研究會收穫（松山）

五月十八日夜　岩本素人報

五月雨と共にをちつく女客　武子
雜巾を貸せと大雨へ御苦勞さ　雨眠
何所をどうくゞるか雨の漏って居り　玄々子

女　五健選

姉妹の好みぐに衣更へ　三雪
ウキンドへ入れて置きたい女なり　青帆
本妻に直る妾の賣る箪笥　同
女の子一人叱れば二人泣き　武子
行き屆く掃除長女を賞められる　水樹
女房に見せてはがれた貸家札　同
女房に逆ふた下駄雨に逢ひ　同
軟かい丸み十七八になり　五健
情熱の女と言ふが痩せて居る　同
ほうづきをならすに似合ふ日本髪　同
集金の女やさしい腰を据へ　雨眠

頂戴をさせて前髪撫でゝやり　同
監督となつて淋しい交換手　同
切れ話し女あつさり片付ける　支々子
貧けぬ氣で女房晴れ着を縫つてゐる　同
涸れ切つた涙に女強くなり　同
女房が出れば掛取り素直なり　同
腹が立つてたまらぬ朝の交換手　素人
女の子八百屋の前で立ち止り　同
口程に女鶯いては居らず　同
その先は女どうしても言はず　同

第十九回　南海至誠川柳會（大阪）

五月十日夕於天下茶屋集會所　竹内多聞報

兼題　乞食　路郎選

方圓の器に從はず乞食なり　一福
乞食してゐればお金が殘ります　青砂郎
物乞に留守を見られた弱さなり　多聞
一晩の親にされてる乞食の子　黑天子
親切な地主に乞食死に秋れ　朝隔
只露命つなぐに乞食子を泣かせ　萬年青
前身を云はず他郷に物乞ふ　同
乞食の厚釜しいは茶をよばれ　一杉
用足して來てその乞食と又出逢ひ　同
はるゝくと海を渡つて乞食來る　貴山
乞食の子ホンマになつて寢てしまひ　同
(軸)その乞食蔵のわからぬほど汚れ　路郎

兼題　夜業　路郎選

次々に子は寢てしまう夜業なり　多聞
感心なよなべ自分の着物なり　末廣
仲人も夜業するとは言はざりし　格子樓
深夜業時計覗いて眠うなり　萬兩
夜業する分と辨當別に出し　貴山
夜業する傍で子供にがんばられ　一笑
硝子窓から朝が迫つて來た夜業　一杉
十時すぎ夜業は長いなと思ひ　朝陽
行幸を前に夜業のつゞけられ　同
落付の無い足音を夜業聽く　萬年青
捗らぬ仕事夜業の鈴をきく　同
夜業する耳え隣りのジャズバンド　黑天子
七時には歸ると夜業言傳ける　同
夜業した疲えれ友は醉ふて來る　青砂郎
深夜業隅の方から唄が出る　同
夜業してハムマーの音癪にさえ　同
夜業して戻れば女房風呂の留守　貴山
(人)夜業までしてきて妻といさかひる　萬兩
(地)夜業だと家を出たのに飲んでる　朝陽
(天)王手飛車隣りの夜業邪魔になり　郎
(軸)呑む父をもつて夜なべも氣がつ　選

席題　道具屋　互

二　點　句

道具屋の道具のやうに親父をり　一稻
道具屋は自分の唾で拭いて見せ　末廣
道具屋へ買つた年まで話してゐ　朝陽
下駄箱もあつて道具屋店になり　格子樓
道具屋の頭もいつか禿げてゐる　路郎
道具屋は碁盤で何か書いてゐる　同
道具屋の埃電車の方へ立ち　多聞
道具屋の一人は軸の文字が讀め　同
まけとけと云へば道具屋拭いてゐる　同

三　點　句

道具屋のあんなとこから親父出る　多聞
道具屋は別に居眠つてもおらず　路郎

四　點　句

御先祖えすまぬ道具に値をつけ　貴山

席題　宿帳　多聞選

嬉しさに宿帳閉じる音もよし　一杉
宿帳に男大きく笑ひこけ　貴山
宿帳が濟むと宿屋の下駄を借り　路郎
宿帳の事も思案の中に入れ　貴山
宿帳に友の歳まで頼まれる　朝陽
宿帳の女中からかふ程に醉ひ　一杉
宿帳へつけた名前が氣にかかり　格子樓
宿帳は歳のところでゆきづまり　路郎
床の間を賞めて宿帳書かしてゐ　貴山
(人)あいそよく引く宿帳へ風呂がき　青砂郎
(地)宿帳へ大きく葉巻吹かすなり　同
(天)宿帳は連れにまかせて山を見る　路郎
(軸)宿帳の女ビールを聽いて立ち　同

席題　蚊帳　互選

蚊帳を吊る程でもないと獨り者　格子樓
仕事場を通して蚊帳が覗かれる　貴山
蚊帳越しに見ればお菓子を食べてる　青砂郎
寢惡兒蚊帳のおもしになつて寢る　穗積
蚊帳を吊る手に二三疋寄つて來る　青砂郎
お茶漬を蚊帳の中から聞く息子　路郎

三　點　句

木賃宿宿帳の匂ひに草疲れる　朝陽
旅歸り晝寢の蚊帳を吊つてやり　同
蚊帳の中俺の世間に似つてるなり　末廣
蚊帳の裾踏んで女は冷水を汲み　多聞
何べんも蚊帳から覗く時計なり　貴山

四　點　句

日曜の朝蚊帳越しの風を受け　一杉

起さずに蚊帳を外してしまふなり　路郎

丸龜わかて川柳會（丸龜）

平澤ゆすらん報

長話し　浮沈子選

蚊遣香また焚きつけて長話　圓太郎
長話すんで急ぐと云ふて去に　素馬
長話午砲に一先ず腰を上げ　甘々坊
下駄の歯で土を堀り〳〵長話　一二三
(人)長話し迎ひ提灯見えて切れ　哲夫坊
(地)長話子供一人で房つて來　蝶々
(天)打ち水の隣りえ詫びる長話　ゆすらん

宿題　尺八、抽出　浮沈子選

銘刀のやうに尺八腰にさし　甘々坊
妻の琴ちと尺八に物足らず　一二三
叱られた日だけ尺八恐れ入り　ゆすらん
抽出の手紙が見えずあわて出し　甘々坊
男手を借りて抽出やつと開き　素馬
(佳)抽出え加勢火箸を抜いてくる　ゆすらん
(佳)そんなものないと抽出手で押へ　一二三
段梯子抽出の鈔音を立て　蝶々
抽出の中で通帳開けて見る　同

阿波座句會（大阪）

松盛琴人報

題　虫　歯　琴人選

チク〳〵と痛む虫歯へ夜が長い　四五磨
虫歯なら俺にもあると人へ見せ　ひかる
小遣もない上むし歯痛んで來　大地
口あいて虫歯は無いと祖母に見せ　方水
一と寢入り虫歯けろりと忘れてゐ　不二夫

(軸)抜いて貰をうくと虫歯二三年　琴人

かほる居偶會（大阪）

五月二十七日　高橋かほる報

火は赤く客間の夜にペルシヤ猫　愚陀
客間へ遠くあかんべをして　亂耽
暫は客間冷やりするばかり　かほる
湯上りの妾へ南地から便り　亂耽
番附を見てる妾を蟻がさし　かほる
不自由の無いお妾に肩がこり　愚陀
一人娘の部屋に眞っ赤なチユーリップ　同
包まれてゐた樣に咲くチユーリップ　かほる
甘そうな物が出そうなチユーリップ　同

川柳雜誌社御旅支部

六月例會（大阪）

六月二日　於萬兩亭　櫻井如一報

路郎先生の來會を得。折柄市議戰の結果が發表され萬よし氏當選確定の報に一同喜色溢れて自づと話題は同氏を廻りて祝意を表す路郎先生來席の前萬よし氏を訪問され句あり「萬よしが男になつて店狹し」

兼題　蓑　盆　路郎選

蓑盆出す禿の方へ氣をとられ　土筆
煙草盆投げつけられし空燐寸　路烏
灰吹の音高く嫁お茶を出し　多郎
新聞を見乍ら吐月峰さぐりあて　荷月
苦節十年まだ空罐の蓑盆　翠夢
吐月峰の音色で讀める親の痛　荷月
蓑盆あまり立派で汗が出る　圓角
(軸)清廉のぼんと叩いた蓑盆　路郎
(同)盆蓑まだ横にある借りた金　同

丸刈　互選

入營で丸刈にする口惜しさ　和彌
丸刈にすればよいのにあの頭　彬郎
丸刈の青さよ子等は無邪氣なり　翠夢
丸刈になつて軍服よく似合ひ　多郎
丸刈で赦す氣になりそつぽ向き　土筆
法螺吹きは急に丸刈に變つて來　圓角
丸刈も軈て天下に呼びかけむ　荷月

名賀壽會例會（尼崎）

五月十二日於　大物區事務所　古朗報

席題　油　斷　互選

三度目の油斷は大分大き過ぎ　悟空
なれきつた機械に腕をはさまれる　木三
油斷した顏へ先生指を差し　壽郎

席題　汐干狩　孤舟選

汐干狩蛸穴見付けた友を呼び　析草
汐干狩ガールバックが邪魔になり　悟空
汐干狩いつそ泳いで見たい頃　蟬古
汐干狩ボートの人へ呼びかける　木三
姉一人天幕から出ぬ汐干狩　柳堂
汐干狩ずつた袂を頼まれる　東北
母一人舟に殘して汐干狩　壽郎
おもしろう取れて入陽を尻にうけ　陽喜亭
汐干狩戻りの岸え孫を抱き　同
(軸)汐干狩大きな波をうれしがり　孤舟

席題　印　鑑　突支坊選

支配人つげの印鑑押して居る　虐白
實印もなくて氣安う暮して來　木三
親友の保證の印は強くなし　苦香龍
捺印をすると證書の見直され　柳堂
讀みにくい印を勿体ぶつて捺し　萬樂

印鑑が違ひ區役所そつけなし　孤舟
印鑑は金庫の底で無事に居り　明果
頼まれた保證の印え念を押し　陽喜亭
零落の身に印鑑の立派すぎ　壽郎
（軸）取下げの金へ指輪の判を押し　突支坊

席題　白　粉　壽郎　選

たしなみが知られど母の若くなり　陽喜亭
出戻りのうつすら塗つて用に出る　析草
おしろいを落して會うかと思ひ　苦香瓏
倫落の白粉がしむ孺子の衿　東北
苦勞とは別に白粉塗つてゐる　悟空
（佳）女の子鼻へなすつて嬉しがり　東北
（佳）白粉の瓶を見つめる病上り　悟空
（佳）お妾の素顔を見られまい苦心　孤舟
（佳）襟足へ塗る白粉へ灯がともり　析草
（佳）白粉を忘れて世帶ざかりなり　萬樂
（人）白粉の話仲居の晝の風呂　蟬古
（地）白粉へ此頃女中分りかけ　明果
（北）白粉をつけて火元はまた噂　苦香瓏
（軸）白粉をつけて見たらと亭主云ひ　壽郎

兼題　行　末　萬樂　選

流行妓の不圖行末を考へる　柳堂
行末をまかす夫の弱〳〵し　孤舟
行末は知らず子供が殖えて行き　東北
行末の事まで話す金屏風　壽郎
行末を考えて見て恐くなり　十五夜
大望もなく行末を貯めて居り　蟬古
行末は知らず憐れな支那奇術　同
（佳）行末は次男にかゝる腹を決め　突支坊
行末を思ふ涙を見つけられ　孤舟
行末へ藝者本當の顔になり　壽郎
（人）行末の噂の中へ醉つていに　虚白
（地）悪い方へ向きます八卦奥えれい　陽喜亭
（天）行末を問べば唄ひませうと言ひ　苦香瓏

兼題　突　然　陽喜亭　選

突然の客に寢床を亦たゝみ　香翠
突然の値上げ家主が變つて來　明果
突然の事でと暫時息を飲み　桃谷
突然の見舞ひ婦人科ちとあわて　析草
突然に何かと思や寄附のこと　萬樂
突然に物云ひかける吃の子　悟空
突然の寢言を母はのぞき込み　柳堂
突然に訪へば彼女の東れ髪　苦香瓏
突然の汽笛に子供泣き止まず　十五夜
（佳）豫告なき整理にみんな怖て居　虚白
新婚へ又慌てさす客が來る　壽郎
だしぬけに來て妾宅をまごつかせ　香翠
（人）都から不意に孕んだ娘が戻り　孤舟
（地）柴葉服豫告もなくて首になり　同
（天）眞夜中をびつくりして「カネガクレ」　萬樂
（軸）だしぬけの父に下宿はうろたえ　陽喜亭

席題　ハンカチ　互　選

ハンカチを探せばパット手にさはり　孤舟
寄宿舍の窓へハンカチ張りつける　東北
ハンカチを丸めて香具師は人を寄せ　悟空
投薬の口にハンカチひろげて居　香翠
ハンカチを抜けさうになる藥瓶　萬樂
隠し藝末座へハンカチ借りに來る　苦香瓏

暑中見舞の廣告を募る…

奮つて申込まれたし

雜誌の上で句や文章を見て、風交を深めたいと思つても肝腎の住所氏名が分らない爲めに、文通さへも出來ないといふ憾みがあるので、川柳家各位の住所氏名を一度に知る便宜のため讀者諸彦の御希望に依り、本年も左の暑中見舞名刺廣告を掲載することにしましたどうか奮つて御申込を願ひます。

◆一　口　金五拾錢

幾口でも申込んで下さい。一頁希望の方に限り金七圓一口分の原稿はなるべく簡單に願ひます。

◇申込期限　七月十日迄（八月號に掲載）

大阪市住吉區杭全町六〇三
事務所　川柳雜誌社
電話天王寺一一六七番
振替大阪七五〇五〇番

廣告御申込は成るべく振替御利用の上前金に願もます（三錢以下の切手代用でも差支へありません）

飛燕往來

▲長崎柳秀氏（ウキン）

五月三日ベルリン、ツォー驛出發ブレスラウ及プラークを經て本日六日午後ォーストリヤ首府ウキンに着いたし候何分西洋の建築はどの町でも餘り大して相異なき樣に見へ候へども又々新しき所も御座候はんかと明朝の遊覽自動車を樂しみにいたし居り候向ふ二ヶ月の長旅に御座候へば出來得る丈け飲食物、睡眠に注意し疲勞せぬ樣心がけ居り候へば何卒御安心下され度候 御承知の通り歐洲の旅行は汽車の通路、プラットホームの番號、金錢の兩替、旅館等一々氣を遣ひ候事なかなか繁く川柳を考へる程の餘裕なく日々苦しみどうしに御座候 來る拾日よりはいよ〳〵伊太利國内に立ち入り申候 ことなれば言葉の全く不通のため一層赤毛布を演じ候はんと一行覺悟いたし居り候皆々樣の御幸福を祈りつゝ 五月六日 ウキン 柳秀

▲酒井駒人氏（塔ノ澤から）

今朝自轉車で箱根へ來ました。今掛茶屋で汗をふいてゐます。これから一氣に湯本・小田原を通つて國府津まで、そこで又休んで平塚へ、ツグイスの聲を聞きながら親友一人と駒人生（六月九日）

▲松村敏郎氏（桑港）

拜啓恐縮ですが、左記質疑何等かの方法で御教示被下、三月號四四頁中段祝吟「祝谷まんまる肥えた子が生れ」祝谷の意味と讀み方。四月號四七頁、繼母とうまを合して肩がこり宿直へ淋しうまの合うたこと「うまを合はせるの意味」當地新聞紙へ問ひましたが要領を得ず、氣掛りですから。（前後左右參照）

▲高橋かほる氏（大阪）

此の度四ツ橋の畔に四ツばしだんごと鬼貫餅とが賣出されました。だんごは足が早く昨今の暖かさではお贈りしても味が變はります故……繪にしてお送りいたします。一度御風味にお越し下さい。

▲長崎柳秀氏（伊太利）

伊國ナポリーより、遙に御皆々樣の御幸福を祈り申候幸に無事、伊國ローマ市も見學いたし候羅馬を見ざれば藝術を語る勿れとか 申し候が誠にこれあるべきことゝ 今更感々服々仕り居り候 明日はベスビオ並にポンペイ見學の豫定に御座候乍勝手柳友 諸彦へ萬々よろしく御傳へ被下度候 旅館の窓より東をながめ候へば全く繪葉書の通りに御座候 別して 天氣晴快涙穩かにてのんびりいたし申候 Park r. H t l Napoli 柳秀拜

▲蛭子省二氏（朝鮮光州）

冠省、昨日二柳子樣からお葉書を頂き貴殿御病氣の趣きを知る。氷囊とカイロではお苦しみとお察し致します。時々突發の御羅患の御樣子。餘り御無理の積らぬように。平素の御自愛を祈入ます御經過いかにや 御見舞まで。に以上（五月卅日夜）

▲庄萬よし氏（大阪）

トウセン、カンシャニタエズ ケン

▲蛭子竹馬居氏（朝鮮光州）

啓廿九日附お葉書拜見、今朝六月號つくビルヂング結構、短かいもので諸氏の高見を承はり度いもの。句會やら柳友の來訪が餘り續くと神經衰弱が治りますまい、時に靜養が大切御自愛を乞ふ私も書見で頭が休まらず、而て益する所少なし肩休めに、止めればならぬ晩酌をやつては一層失敗、然し八月からは攝生する丁度持病季に入るから。柳秀博士より當方へも一度葉書來る、七月號拙稿としては「アリンス國辭彙をよむ」之は新刊評ゆえゼヒ七月號に早廻しを願う、モウとつくに書いてある而て明るい部屋を一室借りるかも知れぬ古句方面を離れたものも送り度いが他誌からも依頼を受けて手がまわらぬ…… お屆してある拙稿で不用のものは御遠慮なく御返送下さい役立つもの丈け 御採用で結構。△萬よし君 どうであつたろう▽時々乞御通信（六月二日夜）

▲岩本素人氏（松山市）

おはがきありがたう、おからだはどうてす私も一度歸りたいとは思ひますが 何れ夏はやり切れないから、一度は歸らなくてはならぬと思ひますからそれまで 辛棒します。さう度々歸る譯にも參り兼ねます。（以下略）

杭全町 MEMO

二柳子

▽大阪市電氣局の慰安會で 出雲大社に參拜する事になり、六月十三日柳友の鵜峯君と二人が神國の大社驛へ ぶちあける樣に降された。こゝで簸川支部の幹事伊藤緣之助君が私達を迎へて下さる ことになつてはゐるのだが、双方顏を知らぬので不安ながらプラットを出ると、私達の方に向つてしきりにハンケチを振つて居る青年がゐる。「川柳雜誌」を差上げると、直ちにかけ寄つて來られたのが緣之助君であつた。一昨年七月雨の日に來て突然未知の川柳家 尾添雷相君に出迎へられた思ひ出や、柳談に 花を咲し、青葉の薰る神苑を通り 緣ノ助君の案內で神社に參拜した。

▽歸路大社の川柳家小玉互苦路君と逢ひ、驛前の某旅館で暫く休憩、寄書などして直ちに二氏に見送られ名殘り惜しくも 大社驛で別れ一畑藥師に向つた。臨濟宗一畑藥師は簸川郡一畑山にあつて、全國でも著名な藥師寺である。參拜後一畑電鐵で北松江停留場で下車すると一人の若い紳士が しきりに私を探してゐられるのを見受け 直に初對面の挨拶をした。

▽これこそ松江支部の奧田雪緒君であつた。町二君から私の行く事が 知らしてあつたのださうだ。雪緒君の案內で自動車で松江城に向つた。天主閣から市內で重なる役所會社などの說明や自宅があの邊などと觀光をほしいまゝにして再び自動車に乘る。一昨年の暮に目拔きの町が二百余戶灰燼に歸したのが早くも復興されて 立派な大通りとなつてゐる。安來節で有名な松江大橋を通り拔けて、松江驛に向ふ途中雪緒君は下車されて、松江川柳家の先輩青砥可明氏と 同伴され、驛までわざ〳〵見送つて下された。あわたゞしい旅の時間を惜しみながら、もう少し時間があれば小集會でも開きたいなどと、川柳家としての懇切な言葉に動かされ、柳友の隔意なき厚意に涙ぐまじく感じながら松江驛で可明、雪緒の兩氏に見送られ 歸阪の途に着きました。

▽同人の萬よし氏が 市議に立候補されましたので社友同人の有志で後援會を 組織し大阪附近の社友 同人に 御援助を願ひました。早速御賛助下された方々は路郎主幹、一徹、光路、源坊、素人、杏三、柳骨、孤舟、町二、貴山、かほる、亂耽、双葉子、新水京郎、鮎美、鵜峯の諸氏と私

▽同人の新水氏と舟々氏とが 五月十五日鎌倉、東京、善光寺、親不知、湯谷溫泉へ廻遊されました。

▽同人柳骨氏が らこの頃漸く余暇が出來る樣になつたから句作に精進する との通知がありました。

▽同人駒人氏は六月九日自轉車で 塔の澤から箱根へ廻つて來られたそうです。

▽社友雪緒氏が六月九日駿足會 創立第一回に宍道湖畔を徒步で 十六里の行程を了せられたそうです。

▽近藤テルホ氏が社友となつて 活躍されることになりました。

▽生田翠夢氏が社友となられました。活躍を祈ります。

▽同人孤舟氏は、家事の都合で退社されました。

▽本田溪花坊氏が經營されてゐた 大大阪は同氏が健康を害されたので 休刊されることになりました。

▽松山支部では 冷々子氏が、亡父の中院中なので、西山玄々子が代つて例會を開催して下さいました。

▽芦城川柳社では 猫柳發刊三周年記念句會を六月二日に開催されました。

▽川本皎月氏は 四月十六日三十八才で長逝せられました哀悼の意を表します。

▽本號の編輯は六月十六日事務所で 路郎先生、ひろし 亂耽、たけしと私とで致しました。

轉居

▲中野柳陽氏は奉天青葉町一八 ▲中川眼隧子氏は金澤市木綿町五五へ ▲安西杏三氏は大阪市東成區北清水町八九一へ ▲島田翠峯氏は 大阪市天王寺區天王寺町九三五 中西方へ ▲愛知樂二氏大阪府中河內郡龍華町安中へ ▲橋本言也氏は京城市永樂町二ノ八四へ

改號

藤井椿薰氏は青柿と改號

訂正

五月號の例會「半襟」文久選中半襟の貧しい指に今日もふれ 月郎とあるは月下の誤り

編輯後記

▼ざくろの花が又赤くなつた。あたりまへだつたら浴衣がけで輕い氣持になつてペンを走らせてゐる筈だが、此ごろの私はきら〳〵する外光に一種の痛さや惱ましさを感じてゐる。ペンが重たい。食慾がない。それでゐて煙草ばかり喫うてゐる。前號編輯前から少〻く健康を害してゐたが、編輯後とう〳〵寢込んでしまつた。脚は炬燵であたためい、頭は氷枕と氷嚢で冷やすといふ狀態で唸なつてゐたが、そんな中で「假の姿」の漫評や編輯後記などを書いた。それも十日程すると起きられるやうになつた。今でも、決してよくはないが、寢込むほどでもない。私の病臥を案じて下さつた柳友諸君に近況を報じて御禮の言葉に代へたい。

▼社の方は相變らずの發展を續けてゐる。殊に同人萬よし君が市議に當選したのでスツカリい、氣持になつてゐる。遠隔の地の柳友までが物質的に精神的に應援して下さつたことは、ひとり萬よし君のよろこびではなかつた。川柳による力、といふものを感じさせられて嬉れしかつた。感謝の外ない。

▼萬よし君の市議當選で、私の家宛に祝電が來る、わが事のやうによろこんだ手紙や葉書が舞ひ込む。まるで私が當選したやうである。萬よし君からの電報や號外を手にしてよろこんでゐる處へ、拳人君が飛び込んで來たので一緒に選擧事務所へ出かけた。事務長のひろし君が「散髪をしたら げつそり痩せたのを感じた。事務長なんて幾らもらつても厭やだ」と述懷する。常日頃の彼を知るものは尤だと思ふ。しかし、よく闘つた。三笑、加香の諸君等が當選御禮のビラ配りに勢よく出かけて行つた。柳友では革郎君が尤もよく熱辯をふるつてくれた。私は一庭君寄贈の賀帳へ祝吟一二を記して御旅支部の句會にのぞんだ。これが六月二日のこと。

▼五日の夜は聖駕奉迎川柳會、九日の夜はひろし居の月評會へ出席した。例によつて紋太 山雨樓氏が參會され、筆記には町二君が來てくれた。

▼萬よし君市議當選祝賀句會が十五日の夜、その言論戰場の一つであつた端の坊で開かれた。久しく顔を見せなかつた輝翠、莢豆の諸君までが喜びを交換しに來た。なんといふ素晴らしい人氣だらう。川柳詩人が大大阪市の市議に當選したといふよろこびが會場に滿ち溢れてゐた。即興として席題「萬よし」を課し、その一句々々が讀み上げられるたびに歡聲が湧き、庄健一君をして或は喜ばし、或は苦笑せしめた。（會報句參照）

▼同人多聞君は月餘に亘り支那大陸の氣分に浸つて來た。「思へば江南蘇杭の風物 長江の流、北支の黄塵、滿蒙の沃野、金剛の雄峯、さては吃茶 老酒の魅感何一つとして友のささやきならぬはなく、彷彿として今尙眼前に往來してゐます」とは同君の書信の一節。

▼前號で新設したビルディングは豫想以上に好評である。お互によりよくすることにつとめて頂きたい。

▼「飛燕往來」といふ欄を新設した。私信を公開することは非禮であるとは思ふが、それ等の私信のなかには寧ろ柳友諸君の全部或は一部に知らす必要のあるものもあり、中にはなか〳〵興味の深い書簡もあるので差支のないものと思つたものだけを發表することにした。

▼川柳に關する質疑、意見の交換といふやうな欄を設けて欲しいといふ聲が又々起つて來た。い、傾向だと思ふ。大いに質疑を出してほしい。質疑さへあれば何等かの方法で希望にそひたいと思つてゐる。一路集の選者に必ず選後感を書いて欲しいといふ注文も來てゐるが、これは忙しい中を特に選して貰つてゐるむきもあるので必ずといふ譯には行くまい。句評が聞きたいといふ人々のために月評が生れたのであるから、そんな方には特に月評の熟讀をおすゝめしたい。

▼從來の編輯後記を二分して「編輯後記」と「杭全町MEMO」とし、前者は私が、後者は二柳子君が擔當することにした。

▼「川柳一糸集」がいよ〳〵出た別項川柳書架を御一讀の上、せい〳〵前田五健氏の勞に酬いられんことを切望する。

▼本田溪花坊氏から同氏の健康が少しく勝れないので「大大阪」を休刊し郊外で暫く靜養するといふ通知に接した。同誌は氏の箇人雜誌で 私等の立場とは自ら趣を異にはしてゐたが、休刊すると聞かされては何んだか寂びしい氣がする。私も絶えず健康が勝れないので、同情の念が殊に深い。（路郎生）

投稿規定

▼句稿は各題別紙に認め、住所氏名を明記すること。

▼書體はなるべく楷書「川柳雜誌原稿」と封筒に朱記すること。

▼締切は嚴守されたし。

▼各地會報は清記のこと。

▼用紙は半紙又は同型の原稿紙に限る。

▼投稿其他につき御問合はすべて返信料封入のこと。

募集

第六卷第九號課題

七月五日締切
（各題十句以内）

▼倉　大島濤明選
▼蜂　松丘町二選
▼耳隱し　伊藤綠之助　石川双葉子　共選

第六卷第十號課題

八月五日締切
（各題十句以内）

▼稻妻　篠原春雨選
▼胸算　橋本一柳子選
▼欠伸　住田亂耽　楊井二南　共選

毎號募集

▼近作柳樽（拾句迄）麻生路郎選
▼各地柳壇（會報）
▼文章（評論研究感想吟行漫文）

社告

社務一切（編輯に關する件、投句、購讀廣告）の用件は下記川柳雜誌社事務所宛に願ひます

價定

普通號　一部　金參拾錢
新春特輯號　一部　金五拾錢
八月特輯號　一部　金四拾錢
半箇年前金（特輯號共）壹圓八拾錢
壹箇年前金（特輯號共）參圓六拾錢

廣告料

本誌への廣告に就きましては本社へ直接御一報下さいますれば御相談に應じます

▼御送金は振替口座穴阪七五〇五〇番へお拂込みになるのが一番確實であります▼誌代受領は送本によつて御承知願ひます▼送本封紙に前金切の印ある時は直に御送金を願ひます▼御希望により集金郵便を差立てますが御不在中でも頂ける樣に願ひます、但集金郵便（一年分）には定價の外に手數料十錢を申し受けます▼御注文には何月號よりと御指示願ひます▼轉居又は改名等の節は舊新併記して御通知願ひます▼川柳雜誌に關する御用件は個人宛にしない事

昭和四年六月廿五日印刷
昭和四年七月一日發行

第六卷第七號
（毎月一回一日發行）

編輯兼發行印刷人　大阪市西成區千本通五丁目七番地　麻生幸二郎
發行所　大阪市西成區千本通五丁目七番地　川柳雜誌社
振替穴阪三一五一四番

大阪市住吉區杭全町六〇三番地
川柳雜誌社事務所
振替大阪七五〇五〇番
電話天王寺一一六七番

賣捌書店

（大阪）大賣捌　サクラヤ書房。（明文堂　其他市内各書店）
（東京仲見世）玉森堂（神戸）米田、後藤、（國館）石塚
（石川縣小松）マコト屋（京都）三宅（松山）弘文舍

川柳雜誌社關係の人々（順はろいい）

賛助員

池澤樂居　伊藤彦造
大道弘雄　西原柳雨
岡本一平　大島濤明
片岡直方　岡田三面子
田中辰二　吉川花菱
嘉納純　川上三太郎
田中香涯　吉田清
長崎柳秀　安川久流美
國枝史郎　岡鳥平
藤村作　前田雀郎
小出楢重
藤本卯之助　木村半文錢
赤井清司　柴谷柴舟
末弘嚴太郎　篠原春雨

客員

蛭子省二　桑原京郎
森東魚　近藤テルホ
楊井二南　柳川洲馬
原史風　北山悟郎
長谷川一徹　水谷鮎美
太田朝陽　亀井花童子
安西杏三　楊井圓角
和田源坊　嶋田翠峯
竹内多聞　川合舟々
高見柳骨　橋本二柳子
高橋かほる　牧田普門
本田柳一路　生田翠夢
友淵貴山　水田黄彩
中野柳陽　伊藤綠之助
中澤濁水　岩本素人
越村加香　住田亂耽
矢田冷刀　麻生葭乃
中島鐵洲　松盛琴人
詫間三猿堂　安井ひろし
辻左馬　清水光風
中川眼隱子

社友

森田翠夢　櫻井圓角
櫻井花童子　太田朝陽
長谷川一徹　水谷鮎美
原史風　北山悟郎
六角桂風　松丘町二
石川双葉子　朝田新水

同人

中見光路　岩崎柳路
奥田雪緒　伊藤愚陀
酒井駒人　主幹
淺井冷々子　麻生路郎

編輯局（同人）

萬よし　庄

大阪市南區新戎橋南詰
道頓堀支部　幹事　庄　万よし
大阪市北區北森町三十二
天滿支部　幹事　北山悟郎
大阪市外高石町羽衣
濱寺支部　幹事　太田朝陽
神戸市花隈町九六
神戸支部　幹事　楊井二南
山口縣山口町石原小路
山口支部　幹事　柳川洲馬
東京市外杉並町高圓寺八二三
東京支部　幹事　岩崎柳路
函館市青柳町五〇
函館支部　幹事　亀井花童子
朝鮮仁川仲町一丁目八
仁川支部　幹事　矢田冷刀
松江市堂形
松江支部　幹事　奥田雪緒
石川縣小松町猫橋詰
小松支部　幹事　本田柳一路

高知市本與力町
高知支部　幹事　中澤濁水
大阪市此花區亀甲町二丁目七九
梅田支部　幹事　水谷鮎美
大阪市外阪急沿線刀根山病院内
螢ヶ池支部　幹事　牧田普門
金澤市八幡町五三
金澤支部　幹事　中川眼隱子
大阪市東區糸屋町二丁目七
糸屋町支部　幹事　川合舟々
和歌山縣田邊町幽靈松下
田邊支部　幹事　辻左馬
島根縣簸川郡高松村
簸川支部　幹事　伊藤綠之助
豐橋市外牟呂二二一
豐橋支部　幹事　白井梅里
神奈川縣平塚町旭座前
平塚支部　幹事　酒井駒人

兵庫縣加古川町大川町
加古川支部　幹事　水田黄彩
京都市七條大宮東入
京都支部　幹事　桑原京郎
山口縣防府町宮市八王子内
富岡支部　幹事　兼重白鷗
鳥取市川端町一丁目
鳥取支部　幹事　中島鐵洲
大阪市東區北濱二丁目一六竹内方
北濱支部　幹事　六角桂風
別府市驛前通り
別府支部　幹事　詫間三猿堂
堺市大町西三丁目十三
堺支部　幹事　友淵貴山
松山市外祝谷
松山支部　幹事　淺井冷々子
大阪市外守口町車裏
守口支部　幹事　朝田新水
大阪市東區農人橋二丁目二六
御旅支部　幹事　櫻井圓角

古本屋時代

今のやうにあさから〳〵新刊が出ると新刊を一々讀破することは容易ではない。たとへ新本を買つてもいよ〳〵讀むころになれば、もう古本で至極新らしい本が出てゐる。こうなればわざ〳〵新本を買ふ必要がなくなる。極く綺麗な古本が出れば全く新らしい本を買ふのは莫迦らしい事である。殊に

公立社の棚

には斯うした新らしい古本が時々提供されるのであるから我々讀書子にとつては、誠にありがたい譯である。諸君も私と同じやうに公立社の棚から至極最近に出た本の古本を求められたならば幾冊か求めるうちには幾冊かをロハで讀める利益があらうと思ふ。

（路郎生）

古本

高價に申し受けます。

御通知次第早速參上確實

迅速に御取引致します。

▲日本橋を南へお渡りになつたら、直ぐ南へ這入つた東側です。本店が從來の店の一軒置いて北隣へ移りました。從來の店はそのまゝ營業を續けて居りますから一層お引立の程祈上げます▼

公立社書店

大阪市南區日本橋南詰南入

電話南五六二番

謹告

大阪市市會議員改選に際し本社同人庄萬よし君が南區から立候補をなし、第二位で當選の榮冠を戴くことになりました。これ一つに同君の熟ゝカゝの結晶の賜物とは云ひながら、又柳友各位の御後援に俟つところ多きを思ひたゞ〳〵感激いたして居ります。茲に謹んで御禮申上げます。

川柳雜誌社
代表者 路郎

當選御禮

這般の市議改選に際して迂生の立候補を宣するや地の遠近をとはず・物質的に精神的に柳友各位の深甚なる御後援に預り豫想以上の票數を得て當選の榮を擔ふ。一門の光榮これに過ぎずと感涙いたして居ります。厚く御禮申上げます。尙今後共よろしく御風交の程祈上げます。敬具

万よし 庄 健一

清酒

午後六時 白鶴が待ち妻が待ち

白鶴をチントンシヤンと提げて來る

攝津灘

嘉納合名會社釀

大正十三年三月三日第三種郵便物認可（毎月一回一日發行）
昭和四年六月二十五日印刷納本　昭和四年七月一日發行

川柳雜誌　（第六十六號）　定價三拾錢

◇輕い讀物として　紅茶の後で、電車の中で……

川柳とは何ぞや——の數萬言を聽くよりも本書を繙け！實に愉快に而も不知不識の間に、川柳の妙諦を知悉せん。

麻生路郎編著。柴谷柴舟漫畫並裝幀

川柳漫畫　累卵の遊び

漫畫三十二葉・四六版・美裝・函入

定價壹圓（送料拾錢）

實に氣持のいゝ本だと云はれてゐますのでよろこんでゐます。皮肉で面白いのでよく贈物になさいます。書店で賣切れてゐましたら直接御注文下さい。御送金はなるべく振替を御利用願ひます。（葭乃）

内容概目

川柳漫畫　累卵の遊び
麻生路郎氏が「川柳雜誌」に連載して非常なる好評を博した川柳漫畫漫文集に、更に川柳家諸氏の力作になる佳句名吟を類題により收錄したるもの——。

日月は輝く
「週刊朝日」特別號に掲載されたる川柳佳吟に選者麻生路郎氏が短評を加へて初心者の參考に資したるもの——。

大衆と共に
「講談倶樂部」柳壇の佳什に、その選者麻生路郎氏が短評を附加して一般讀者の興趣を湧かしめたるもの——。

不朽洞

東京市外杉並町高圓寺八二三
振替東京七六七八八番

大阪市西成區千本通五の七
振替大阪五二五八五番